



VANDERUNG SINGEN

学生ワンダフォーゲル会議編

旅 鳥

美わしき山河	輝く雲のはて
遙かな想ひに	ところ結びて
ひた翔け渡れ	汝が故郷
我等名負ひし	ワンダフォーゲル
雲と往け遙かに	若人のくに
永遠なる自由の	光讀えて
鍊え養へ	明日への力
吾等謳わん	緑の旅人

小 林 碧 作 詩

(MWV O.B)

ワンダーフォーゲルの歌

快活に

小林碧 作詩
 小山田栄一 作曲

きりーの　かなた　にかっ　こう
 ないて　　さ　　うも　おや
 まは　に　ほ　ん　ば　れ　　われら
 ワンゲル　せ　わ　し　い　あ　さ　だ　　し　ら　か　ば
 ば　や　　し　に　　ひ　が　お　ど　る　　

二、さあさ行こうよ手に肩組んで
 木霊うれしい　峠道
 我等ワンゲル　心もはずむ
 はずむ心に　荷は軽い

三、強い日射に緑が燃えりや
 希望の野山　ふみ越える
 我等ワンゲル　漂らい雲さ
 明日は何処に　影映す

四、仰ぐ山の端あかねに染り
 峰へ急ぐ　渡り鳥
 我等ワンゲル　疲れも忘れ
 揃ふ歌声　足並も

五、溪のせくらぎ心で聴いて
 星屑仰いで　草枕
 我等ワンゲル　楽しい仲間
 囲む焚火に　夜が更ける

目次

(キャンプファイアを囲みて)

キャンプファイアの歌(全日本学生キャ ソング)	11
遠き山に日は落ちて	12
燃えろよ燃えろ	13
今日は誰方です	14
HOW D'YE DO?	ク
御飯だごはんだ	15
星の夜	16
星かげさやかに	ク
UPIDEE	17
しずかに更けゆく (輪唱)	18
Sarasponde (紡ぎ歌) (ク)	ク
静かな湖畔の (ク)	19
クィクウィマニマニ (ク)	ク
アルプス一万尺(のんきな娘)(手拍子揃えて) ..	20
陽気なチンタ (ク)	22
かなわぬ恋 (ク)	23
夜路を行く (ク)	24
オ！ プレネリ (ク)	25
おゝ牧場はみどり (ク)	26
営 火	27

燃えあがるカガリ火	28
夕べの折り	ク
キャンパーのよろこび	29
たのしつどい	30

(山に魅せられて)

山 恋	31
法政大学山岳部歌(エーデルワイスの歌)	32
山行く人の心	34
一人の山	ク
むかしむかし	35
娘さんよく聞けよ(山男の歌)	36
朝の山道	37
山の路	38
ピクニック	39
ナタ目	ク
山の一日	40
アルプの歌(ロシア民謡と仕事の歌々による)	41
山の子の歌	42
古き友	ク
立教大学山岳部歌(山の友)	43
山の娘ロザリヤ	44
僕の恋人はチロル娘	45
ぼくの山仲間	46
ピッケルの歎き	47

アルプスの恋唄	48
おいらの恋	49
蔵王の山男	50
北岳の歌	ク
山の王者	51
ピレネエの山の男	52
標高一万十余尺	53
富士山見たら	54
槍や穂高は	ク
守れ権現(山の歌)	55
Raiders in the Sky	56
新人哀歌	57
ワングル・ボルカ	ク
ワングル・ズンドコ節	58
山小屋の灯	59
古びし我が山の小舎	60
山の村よさらば	61
穂高よさらば	62
山への別れ	63
いつかある日(デュブラの詩)	64
山の大尉	65
氷のゆりかご	66
針ノ木岳遭難の歌	67
挽歌の山	68

(湖畔に 岸辺に 海辺に)

泉のほとり	69
バイカル湖のほとり	70
美しい湖水	ク
琵琶湖周船の歌(旧三高寮歌)	71
夏の思い出	72
ジグーリー	73
川岸のベンチで	74
カチューシャ	75
北上川(北上河原の初恋)	76
桜貝の歌	77
椰子の実	ク
小さな竹の橋で	78
バリバリの浜辺にて	80
マウイ・ワルツ	81
海女の子供	82
浜千鳥	83
浜辺の歌	ク
海よさらば	84

(旅路にありて故郷をおもう)

心の歌	85
彷徨の唄	86

日本大学山岳部歌(今日は野を越え)	87
旅の歌	88
北帰行	89
蒙古彷徨の歌	90
アルト・ハイデルベルヒ	ク
旅愁	91
知床旅情	92
あゝふるさと	ク
ふるさとの歌	93
ぼくらの故郷	94
心の窓にともし灯を	95
里の秋	ク
母さんのうた	96
谷間の灯	67
峠の我が家	98

(歌え! この若き日を)

祝えこの日	99
若者よ	100
男ならやってみな	101
君が若者なら	102
美しい青年	104
かわいい人	ク
夜明けの歌	105
がんばろう	ク

懐かしい顔	106
学生時代	108
遙かな友に	109
人を恋ふる歌	110
古い手紙	ク
時ふれば	111
森の小径	ク
ねむの木	112
愛の砂丘	113
エメラルド	ク
あざみの歌	114
幸せはここに	ク
罪つくり	115
囚人の歌	116
青春牧場	117
青春は雲の彼方に	118

(冬の日)

雪のふるまちを	119
雪山讃歌(Oh, my Darling Clementine)	120
白い想い出	121
トロイカ	122
シユスブン	123
冬の幸	ク
オ! シーハイル	124

僕のスキー	124
ヒユッテの夜	125
ベチカ	126
冬の日の恋	127
吹雪	128
新雪	129
残雪	ク

(国々を尋ねて)

しゃれこうべと大砲	130
ロッキーに春来れば	131
The Lonesome Yodeler	132
カウボーイの夢(My Bonny)	134
ロックローモンド	135
Hinky Linky Par Lay Vous	136
羊飼の娘	137
ヘイ! ヤシネック	138
はてもなき荒野原	139
道	140
黒い瞳の	142
スリコ	ク
バルカンの星の下で	143
郵便車の馭者だった頃	144
草原情歌	146

(歌え! ふるさとの心を)

津 軽 山 唄	147
どじよっこふなっこ	148
秩 父 音 頭	149
もずが枯木で	150
北 穂 小 唄	151
野 沢 小 唄	♪
糸 魚 川 小 唄	152
谷 川 小 唄	♪
大 町 小 唄	153
丹 波 山 小 唄	♪
中 野 小 唄	154
木 曾 節	155
安 曇 節	156
田 原 坂	157
五ッ木の子守歌	158
島原の子守歌	♪
神 つ き 節	159
刈 干 切 唄	160
安里屋ユンタ	161
平 城 山	162

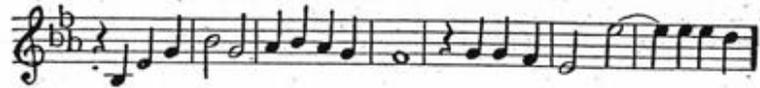
(別れを惜みて)

ダンチ ヨ ネ節	163
サ ヨ ウ ナ ラ	164
別れの日はずらい	165
忘れな草をあなたに	♪
惜 別 の 歌	166

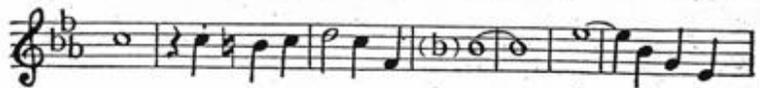
キャンプファイヤーの歌



たそがれの そよかぜ は
そのかみの うたびと は



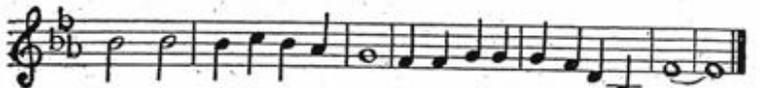
しらかばのもりかけ に わかいひの 一ひとよ
たてごとをだきよせて ひとのよの 一たのし



を た のしくはこ ぶー あーかくも
さ た たえたやま にー あーかくも



や せ かーがりびをー むらさ
や せ かーがりびをー うつく



きの そらとおくたやすなうたごえをー
しい そのころともーとわかちつづー

夜の歌

遠き山に日は落ちて



とおきやまに 日はおちて ほしはそらを



ちりばめぬ 今日のおさを なしおえて



こころかるく やすらえ ば かぜはすすし



この ゆうべー いざやたのしきまどいせん

2. やみにもえし かがり火は ほのおいまは
しずまりて ねむれやすく いこえよと
さそうごとく きえゆけば やすきみ手に
まもられてー いざやたのし ゆめを見ん

燃えろよ燃えろ

フランス古謡

もえろよもえろよほのおよもえろ
ひのこをまきあげてんまでこがせ

- 燃えろよ燃えろ
- 一、燃えろよ 燃えろよ
炎よ 燃えろ
火の粉を まきあげ
天までこがせ
 - 二、照らせよ 照らせよ
まひるの ごとく
炎よ うすまき
闇夜を 照らせ
 - 三、燃えろよ 照らせよ
光と 熱との
もとなる炎

今日は誰方です

今日 は どなたです (誰は) あーあー そうですか

HOW D, YE DO?

How d'ye do? {みなさん} How d'ye do? われら こ こ
をむか え 二 二 } むすぶともがきこころやおど
る How d'ye do {みなさん} How d'ye do do do?

御飯だ ごはんだ



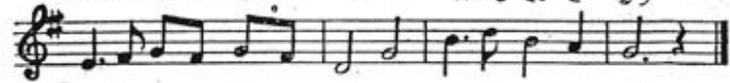
ごはんだごはんださあたべよ



かぜは—さわやかこころもかろく



だ—れもげんきだかんしやして
(おちやわんう—たいはしおどる)



たのしいごはんださあたべよ

星の夜

雲なきみ空に

きらめく光

あゝようようたる

銀河の流れ

我等が希望は

果てなく高し

いざ手をとりあい

勇みてゆかん

ほしかげさやかに

一、星影さやかに

静かに更けぬ

集いの喜び

歌うは楽し

二、名残りはつきねど

集いは果てぬ

今日の一日の幸

静かに思ふ

(燃ろよ燃ろと同曲)

UPIDEE

あさひはのぼるトララトラララものみなあさにめざめたり
こえたからかにうーたうこえは ユビデイデイダ
ユビデイユビダ ユビデイデイダ ユビデイダ

- ユビデイ
- 一、朝日はのぼる
トラ ララ トラ ララ
ものみな朝にめざめたり
声高らかに うたう声は
ユビデイ デイダ ユビデイ ユビダ
ユビデイ デイダ ユビデイダ
 - 二、楽しいキャンプ
トラ ララ トラ ララ
きけ鳥の歌森のこえ
炊事の煙 ゆらゆらのぼる
(くりかへし)
 - 三、日が暮れてきた
トラ ララ トラ ララ
かがり火燃えるあかあかと
楽しきつどいうたえやおどれ
(くりかへし)

しずかに更けゆく

しずかにふけゆくキャンプのよ
るやすらかにねむれとかながな
る ゴン ゴン ゴン ゴン ゴン

サラスボンダ

- サラスボンダ
サラスボンダ
サラスボンダ
オドーラオ オドーラボンダオ
オドラボンダ
レツセツセ オセボセオ
(くり返し)
- 糸をば紡いで
機織りしましょう
絹糸紡いで
機織りしましょう
糸車は 軽くまわる
みごとな糸をば
紡ぎましょう

静かな湖畔の

しずかな こはんの もりのか げから
 もーおきちや いかかと かつこがな く カツ
 コ カツ コ カツ コ カツ コ カツ コ

クイ クワイ マニマニ

クイ クワイ マニ
 オ ニ コ デ イ モ オ チ ヤ リ ヤ リ ウン パ オ ニ コ デ イ モ
 オ チ ヤ リ ヤ リ ウン パ ウン パ ウン パ ウン パ

アルプス一萬尺

アルプス一萬尺小楯の上で
 アルペンおどりをサ 踊りましょ
 ラララ……

お花畠で昼ねをすれば
 ちようちようがとんで来て
 キスをする
 ラララ……

一萬尺にテントをはれば
 星のランプに手がとどく
 ラララ……

槍や穂高はかすんで見えぬ
 見えぬあたりが槍・穂高
 ラララ……

西穂に登れば奥穂が招く
 招くその手がジャンダルム
 ラララ……

チンネの頭にザイルをかけて
 パイプ吹かせば胸が湧く
 ラララ……

剣のテラスにハンマーふれば
 ハーケン唄うよ 青空に
 ラララ……

雪溪は光るよ雷鳥はいずこに
 エーデルヴァイス其処彼処
 ラララ……

陽気なチンタ

トウマス・インカワ 作詞
服部逸郎 作曲

かるく 明るく

はなかんざしの かわいいちびさんどこからきたの
あのかわこえてのをこえてとんできたのよ
かわいいチンタはむこさがしサーサむかいにまいるしょう
クリクリまなこのようなきなチンタはバリのむすめ
むらにもまちにもよろこびをふりまくベツピンさん

2. 花籠さげて可愛いチンタ 村から来たの
甘い香りふりまいて ラララリラララリロー
チンタの草笛がながれる
ホーイさ こっちへいらっしやい
おまえのちっちゃな可愛いおててをかしておくれ
ソーラ みんなで輪をかいて
楽しく踊りましょ

キャンブサイトにかつこう鳴いて
霧の中から朝が来る
ラララ……

槍と砲高を 兵において
お花畠で花を摘む
ラララ……

きせてあげたいあの娘の着物
お花畠の花紋様
ラララ……

若いツバメの浮気じやないか
明日は向うの 山で寝る
ラララ……

カンテラ頼りに君待つ小屋へ
空の飯盆で背が鳴くよ
ラララ……

キャンブファイヤーでセンチになつて
可愛いあの子の夢を見る
ラララ……

山は荒れても心の中は
いつも天国夢がある
ラララ……

雲より高い この頂で
お山の大将 俺一人
ラララ……

かなわぬ恋

mf *かやうに速く*

1. あそこをゆくは ホラヒ ホラホ あのこじや
ないか ホラヒアホ まぎれも一しな
い ホラヒ ホラホ あの
うしろすがた ホラヒアホ

- | | | |
|------------|-----|-----|
| 2. 人のはなしじや | ホラヒ | ホラホ |
| かなわぬ恋に | ホラヒ | アホ |
| かなわぬ恋よ | ホラヒ | ホラホ |
| 誰がしむけた | ホラヒ | アホ |
| 3. 死ぬよりつらい | ホラヒ | ホラホ |
| あの娘のうわさ | ホラヒ | アホ |
| だんなの伴の | ホラヒ | ホラホ |
| 嫁になるという | ホラヒ | アホ |
| 4. 恋に破れた | ホラヒ | ホラホ |
| 男の墓に | ホラヒ | アホ |
| 供えておくれ | ホラヒ | ホラホ |
| 忘れな草を | ホラヒ | アホ |

夜路を行く

the song that brings
For in the hills I hear night in glee. Singing a home back to me.
wait-ing
Three years ago at home I left my love. Still she is wait-ing there for me
Hey!
Sto-do-la Sto-do-la Sto-do-la pum-pa Sto-do-la pum-pa Sto-do-la pum-pa
Sto-do-la Sto-do-la Sto-do-la pum-pa Sto-do-la pum-pa pum-pa-pa

夜路を行く

一、牧場に沿いてはるか
夜路を友と行けば、
星け空にまばたく
なつかしき想ひ出よ

ヘイストドラ……

二、森を抜け野を越えて
夜路を友と行けば
月は空にほゝえむ
なつかしき想ひ出よ

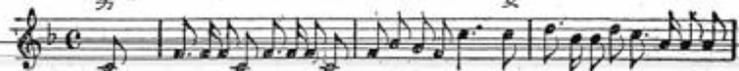
ヘイストドラ……

オノブレネリ

スイス 民謡

男

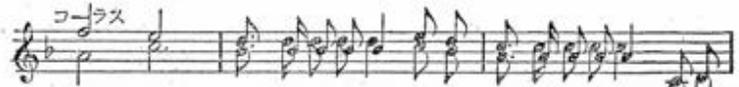
女



オノブレネリあなたのかうちはどこわたしのうちはス



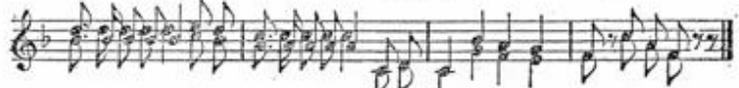
イスランドよきれいなこすいのほとりなのよ



ヤホ ホトウラララ ヤホ ホトウラララ ヤホ



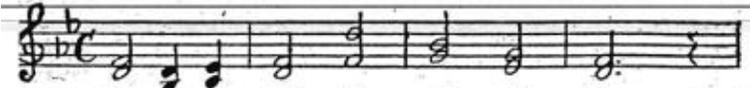
ホトウラララ ヤホ ホトウラララ ヤホ



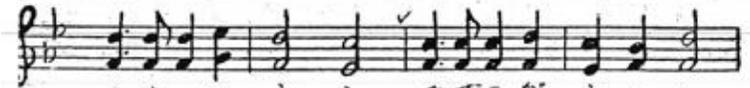
ホトウラララ ヤホ ホトウラララ ヤホ ホラララ ラ ヤホホ

オノブレネリ
 あなたの お家はどこ
 わたしの お家は
 スイツツランドよ
 きれいな湖水の
 ほとりなのよ
 ヤホ ホトウラララ
 ヤホ ホトウラララ
 ヤホ ホトウラララ
 ヤホ ホトウラララ
 ヤホ ホトウラララ
 ヤホ ホトウラララ
 ヤホホ

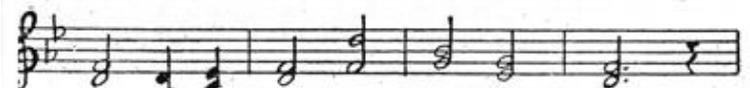
おゝ牧場はみどり



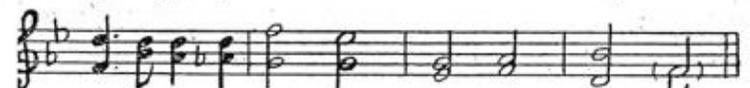
おゝまきばはみどり



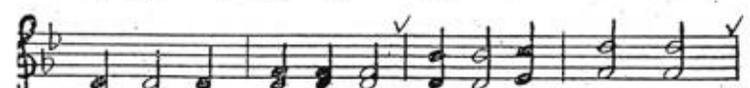
くさりのうみかせがいく



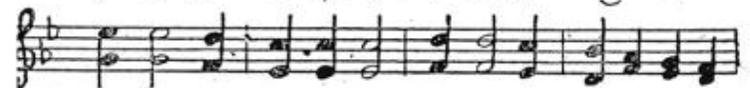
おゝまきばはみどり



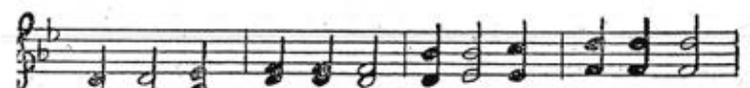
よくしけたものだ



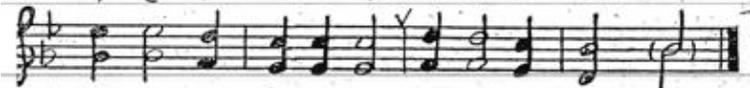
ゆきがとけておわとなて



やまをくだりたにをはしる



つをよこぎりはたうるおし



26よびおけるよわたしに

營 火

倉地宗兵衛作詞
近藤利貞作曲

ゆるやかに流れるように

おほーろー ーづきよにーたーたー ーづめば
 ーえいかにーつー どうー しん二 じんの
 ひとつ ーひとつのー その かお が
 まふたにあー つく うかびく る

- 二、五月の陽射しが心を誘う
流れる雲のそのむこう
あの山あの峰かすんでた
靴を磨きつつ想い出す
- 三、星の降る夜も吹雪の夜も
静かにゆらくランタン
のテントに一つともる時
懐し友の顔ありし
- 四、薪をひろいつそえてくれ
炎を明るくしてくれよ
あ……うすまく火の粉よ
おまえに合わせて歌おうか
- 五、營火の炎闇に溶け
月が山端に沈んでも
永遠のともしびが一つある
心と心照らす火が

燃えあがるカガリ火

- 一、燃えあがるカガリ火に思いをさせて
神と交ろう我等の心は
静けき夏の夜なぎさのほとり
世にわずらい忘れて憩い休まん
- 二、燃えあがるカガリ火に思いをさせて
神と交ろう我等の心は
星降る空を仰ぎ
えも知らぬ喜びを讃え歌わん

夕べの祈り

- 一、苦しい戦いに
二人は離れても
若者と娘は
歌声かわしつづ
共に進み行く
平和を守るため
- 二、水面に陽は落ちて
星影またたけば
若者と娘を思い
恋の歌うたう
川面に流れ行き
この声とどけよ

Camper will Shine To-night

キャンパーのよるこび

Male voice

Cam-per will shine to-night Cam-per will shine.

Cam-per will shine to-night Cam-per will shine.

Cam-per will shine to-night Cam-per will shine. When the

sun goes down, And the moon comes up, Cam-per will shine.

Camper will Shine To-night

Camper will shine to-night
 Camper will shine.
 Camper will shine to-night
 Camper will shine.
 Camper will shine.
 When the sun goes down,
 And the moon comes up, Camper will shine.

たのしつどい

ドイツ民謡

mf

1 | たのしつどい つかすぎて わかれの うー
 2 | こころひらき ころあわせ したしくむつ
 2 | めぐみみちしひびのさちを しずかに おー
 2 | ともにあそびとも にうたい たのしくつど

cresc

たとなりぬ } ゆたかなるお
 びしとき の }
 もいかえし } かずかずのた
 いしとき の }

f rit *a tempo cresc*

もいのはなをむねー にまたこのつぎつど
 もものむねにいだー きたどるいえにむす

p *mf*

うひまで げんきにまたほがらかに
 ふゆめじ みかみも やすらかにあれ

山 恋

1. 同じ想いの憧れを
胸に抱いて行く道は
希望の道ぞ 山男
いざ共々に進まなん

2. 人皆花に酔う頃は
残雪恋し山に行き
涙を流す 山男
雪解の水に春を知る

3. 故郷の山は低けれど
夏はアルプス岩が呼ぶ
岩によづれば 山男
無我を悟るはこの時ぞ

4. み山の紅葉初しぐれ
テント濡らして暮れてゆく
心なき身の 山男
寂しさ知るはこの頃ぞ

5. 街の乙女ら想いつつ
尾根の処女雪蹴立てては
シュテムボーゲン 山男
削登嶺の域は言い難し

エーデルワイスの歌

法政大学山岳部歌 菅沼達太郎 作詞
作曲者不明
中野靖子 編曲



1. ゆきは き えねど はるはきざし め
2. エーデル ヴァイスの はなほほえみ て
3. ほしかげ さやかに そらすみわたり
4. ふぶきは さけび たそがれせまる



- か ぜ は なごみて ひはあたたか し
す る ど き いわかど こんじきにて り
は ず え の つーゆーに あきたちそめ ぬ
も と む る こーやーの ありかもしれ ず



- ひょうが の ほとりを すべりて ゆけば
やまは め ざーめぬ なつのあ さかぜ
きんと ぎ んーとに よそおい こらし
ああこの せつざん ちょうちょう として



- い わ か げ に さ く アルペブルー メ
ら ん う ん お さ ま り ゆ う ぞ ら は れ ぬ
め が み の ご と き し ら か ば の も り
シ ー フ ェ ー の ゆ く て を と ぎ す



むらさきにおう みやこをよそに
いのちの ザイルに わがみをたくし
くれない もゆる やまよりやまと
ああこの せつげん せきばくとし



やまにあこがえる わこうどのむれ
おもわず あーおーぐ アルペンリュウエン
ゆくえも しーらーず さすらいゆかん
かんげつ するどーく シュプウルてらす

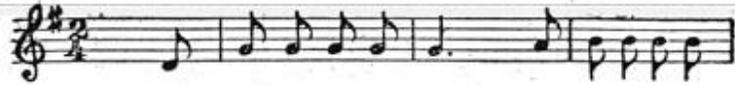
1. 雪は消えねど 春は萌しぬ 風は和みて 日は暖かし
氷河のほとりを 滑りて行けば 岩蔭に咲く アルペンブルーメン
紫香う 都をよそに 山にあこがる 若人の群
2. エーデルヴァイスの 花はほえみて 鋭き岩角金色に照り
山は目覚めぬ 夏の朝風 乱雲おさまり 夕空晴れぬ
命のザイルに 我が身を托し 思わず仰ぐ アルペンリュウエン
3. 星影さやかに 空澄みわたり 葉末の露に 秋立ち初めぬ
金と銀とに 装いこらし 女神の如き 白樺の森
紅い燃ゆる 山より山と 行方も知らず 漂泊ゆかん
4. 吹雪は叫び 黄昏迫る 求むる小屋の 在処も知れず
あ、此の雪山 重畳として シーファーラーの 行手をとぎす
あ、此の雪原 寂寞として 寒月凄く シュプール照らす
5. あ、玲瓏の 雪の高嶺に 心静かに 頂に立ち
尊き山の 教えを受けん 身も魂も 汚れは消えて
永遠に尽きせぬ 白光の裡に 清き幸をば 求め得るらん

山行く人の心

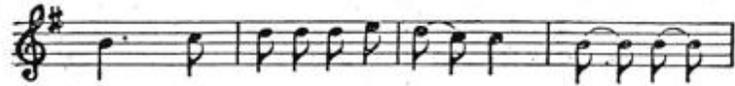
- 一、春の山行く人の心は
雪解の水に
問わば答えん
- 二、夏の山行く人の心は
高嶺の花に
咲いて語らん
- 三、秋の山行く人の心は
空行く雲に
乞わば教えん
- 四、雪をも忍ぶ常盤の緑
強き心に
冬の山行く

- ### 一人の山
- 一、山にあこがれ 山に行き
言葉少なに ただあゆむ
 - 二、一人さびしく ただずめば
タバコのケムリ ただひとすじ
 - 三、恋に破れて 夢も破れ
夕日静かに 山に沈む
 - 四、雪溪すべりて 岩場を登り
ふれる岩肌の 冷たさよ

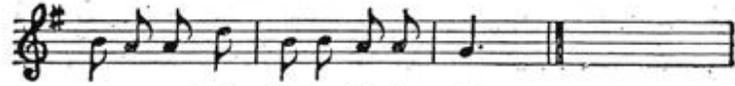
むかしむかし



むかしむかし あるところ



に ト ザンジャ と ゆーう へんーなー



じんしゆが あつたと さ

むかしむかし

- 一、夏になると テントしよつて わざわざ 淋しい 山に登つてよろこんだ
- 二、それで足らず 冬になると スキーとワカンと アイゼンまでつけ山の中
- 三、自分で住む 国の中の 山では足りずに ヒマラヤまでもと押し出した
- 四、こんな馬鹿な人種はいま 地球の上には 居らぬと利口な人は云う
- 五、そうでしょうか 本当ですか ぼくのすぐ前に いるのは 一体なんでしょう

娘さんよく聞け

娘さん良く聞け 山男にや惚れるなよ
山で吹かれりやよ 若後家さんだよ
娘さん良く聞け 山男の好物はよ
山の便りとよ 飯盒のめしだよ
雪の山肌 朝日があつてよ
バラの輝きよ 山は招くよ
ナイゲル踏みしめ 尾根行く心はよ
あおく白光のよ 北岳ピークよ
吹くな春風 散らすな桜をよ
せめて登山のよ 終る日までよ
登山者よく聞け 娘さんにほれるなよ
女心はよ お山の天気よ

あの山越えれば 明日は帰ぬかよ
鬼の住む町よ 帰る悲しさ
あの峰上れば ふもとの村へ通う
峰の別れのよ 心淋しさよ
次行く山何処 ブランは尽きぬ
地図を睨んで 語る楽しさよ
春夏秋冬 山行く心はよ
共に学びしよ 共に歩こよ
登頂終りの ヤッホーが響けばよ
今の苦勞もよ 何処吹く風よ

朝の山道

イギリス民謡

あさの やまみち あるいて いたら
 したの たにから うたごえ が
 すんだ そらに ひびいて くるよ
 ハミング

朝の山道

- 一、朝の山道 歩いていたら
 したの谷から 歌声が
 すんだそらに ひびいてくるよ
 Hum
- 二、きつとかわいい 農家の娘が
 乳をしぼつて いるんだろ
 どんなかおで うたつて いるか
 ア
- 三、耳をすませて 霧のはれまを
 待つていたらば 見えてきた
 (おお)やつぱりそうだ かわいい口で
 ラ
- 四、あしもかろがる 気もはればれと
 山をくだつて いるほくも
 いつのまにか しらないうちに
 (口笛)
 ホ

山 の 路

竹内菊枝作詞

やまのみちを - あ ゆめば - とりはこずえに
 やまのみちを あ ゆめば
 - ささやく - きたれともよ - 山中 潮え
 トラトララ ささやく きたれともよ の
 - ともにうた わんトラトラ ラみぎわに -
 じりへ みぎわに

山の一日

あかるくたのしいやまのいちにち
あさひと いっしょに あるきだし
あのやまこのたによじのぼりよ
るはみんなーで うたおうよ

山の一日

- 一、明るくたのしい山の一日
朝日と一緒に歩きだし
あの山この峰よじ登り
夜はみんなて歌おうよ
- 二、暗い悲しい山の一日
そぼふる雨にぬれながら
あの谷この沢ヤブを漕ぎ
それでもみんなて歌おうよ

ピクニック

丘を越え行こうよ
口笛を吹きつつ
空は澄み 青空
牧場をさして
歌おう ほがらかに
ともに手を取り
ラララ ララ ラララ
ララララ アヒルさん
ララ ララララ 山羊さんも
ララ 歌声あわせて
足並 そろえよ
今日は 愉快だ

ナタ目

- 一、森深く迷い進めば
古きナタ目は導きぬ
人の心のしみじみと
なつかしうれし
小暗き道に
- 二、そはいばらいかにありとも
つとめひるきて共々に
愛の調べを刻みつつ
仰ぎて行かん
真白き峰を

アルプの歌

うれしいうたかな しいうたたく きんきいたなか
 で わすれられぬひとつのうたそれはアルプのう
 た — — — わすれられぬひとつのうたそれはアルプのうた

一、嬉しい歌悲しい歌
 沢山聞いた中で
 忘れられぬ一つの歌
 それはアルプの歌

三、雨の中で風の中で
 元気づけて呉れる
 力強く勇ましい
 それはアルプの歌

二、谷を渡り尾根を越えて
 遠くにこだまする夜
 今も胸によみがえる歌
 それはアルプの歌

四、苦しい時渡れた時
 空行く雲眺めて
 声高らかに友よ歌わん
 それはアルプの歌

山の子の歌

- 一、歌声があの子道に響けば
 あの森かげあの谷間山の子の歌
 山の子は山の子は歌が好きだよ
- 二、雨がふりテルテル坊主が泣いても
 私達は泣かないで山を見つめる
 山の子は山の子は皆んな強いよ
- 三、雲が去り青い空が見られりや
 歌いましょう山鳩の兄と妹
 山の子は山の子は皆んな仲良し

古き友

- 一、古き友集い語ろうは
 すぎし日の旅山の想い
 森にさすらい谷を行き
 峰に立ちし日を忘れえず
 (繰り返す)
- 二、山よ心のふるさとよ
 清らに高くおごそかに
 変らぬ なれが姿こそ
 長き交りのしるしなれ
 (繰り返す)

山の友によせて

(成蹊大学山岳部虹芝寮歌)

一、薪割り、飯炊き、小屋掃除
皆んなで皆んなでやったっけ
雪解け水が冷たくて
苦勞したことあったっけ
今では遠く皆んな去り
友を忍んで仰ぐ雲

二、幕営、グリセー、岩登り
ルンゼで雨にたたかれて

三、友に便りの筆を取る
前傾、外傾、前制動
雪が深くってラッセルに
友の写真に眺めいる

四、堅炭、八峯、ジャンダルム
岩の雪崩をひきおこし

五、友の姿に夢をみる
落葉松もゆる春山を
思わぬ残雪にワカンはき
山よお前は我が心

山の娘ロザリヤ

1. やまのむすめ ロザリア いつも
うたをうたうよ とおいまきばひぐれ
て ほしのでーるころーー かえーれ
かえれもういちど わすれられぬ
あのひよ なみだながし わかれ
た きみのすーがたよーー

二、黒い瞳ロザリア
ひとり歌をうたうよ
風にゆれる花のよう
涙ながして
かえれ かえれもう一度
やさしかつたあの人
胸に拘くは形見の
銀のロケット

三、ひとり娘ロザリア
山の歌をうたうよ
歌はあまく悲しく
星もまたくた
かえれ かえれもう一度
生命かけたあの夢
移りかわる世の中
花の散りゆく

Mein Lieb ist eine Alpnein.
僕の恋人はチロル娘

ぼくのこいびとはチロルむすめ
みどりくさしげるまきばそだちく
ろいかみソールくろいひとみほ
ほえむすがたにこころおどる

僕の恋人はチロル娘

- 二、高きいただきに うたう娘
いとその声 山にひびく
夕日かたむくまでうたは続く
あきずききふける妙なる調べ
- 三、いつまでも歌え たかき峰に
苦しみ消え去る楽しうたを
はるかなる山々にひびくこだま
心魅するうたは 山をつつむ

ぼくの山仲間

スイス民謡

ぼくのやまなかま、みんなきがそろいど
こへのぼるにも、かならずいつしよー
ハリーハロー ハリーハロー ハリーハロー
ハリーハロー ハリーハロー ハリーハロー
ハリーハロー ハリーハロー かならずいつしよー

ぼくの山仲間

- 一、ぼくの山仲間 みんな気が揃い
どこへ登るにも 必ず一諸
ハリーハロー ハリーハロー
ハリーハロー ハリーハロー
ハリーハロー ハリーハロー
必ず一緒
- 二、誰かが誘えば すぐにもまとまり
無理算段しても 出かけてゆくよ
ハリーハロー ハリーハロー
ハリーハロー ハリーハロー
ハリーハロー ハリーハロー
出かけてゆくよ

アルプスの恋唄



1. ほし が ふる あーの コール グリーセイド
2. しら か ばにもたれるーは いとしおとめ



で あ の ひ とは くる か しーら は なを く わ え
が くる ゆり の はー なーを むねに いた い



てーアルプスの こいうた ころときめく
てーアルプスの くるゆり ころときめく



よ なつ かし の が く じーん やさしかの きみ
よ なつ かし の が く じーん やさしかの きみ

ピツケルの歎き

一、もしも 私がヒマラヤに

行けたとしたら 嬉しいわ

氷の岩場を切開き

私の彼氏を通します

天を突き雪のある

そんなお山を待つてるの

二、私の好きなあの人は

とても強いけどのんきもの

ザイルさばきは素適だが

いつでもへばっているばかり

I love a mountain

He is a snowman!

My man is all men and the

only one for me.

三、ある雪の夜 山小屋で

私をだいてヒマラヤの

お話聞かせてくれたけど

ただそれだけなの 淋しいわ

夢にまで見ているのに

ちつとも行かせてくれないの

四、私はシエントのピツケルよ

いつも淋くし床のすみ

高いお山につれていつて

下さる時は来ないかしら

I love a mountain,

He is a snowman.

My man is all men and the only

one for me.

おいらの恋

- 一、山家育ちの俺らの恋は
恋は恋でも酒もつてこいよ
酒は酒でも俺らの酒は
熱い泪の恋の酒
- 二、山家育ちの俺らの恋は
恋は恋でも山もつてこいよ
山は山でも俺らの山は
岩と氷のごつい山
- 三、山家育ちの俺らの恋は
恋は恋でもテントもつてこいよ
テントはテントでも俺らの
テントは
一万尺にはるテント

- 四、山家育ちの俺らの恋は
恋でもザイルもつてこいよ
ザイルはザイルでも俺らの
心と心の命綱
ザイルは
- 五、山家育ちの俺らの恋は
恋は恋でもキスもてこいよ
キスはキスでも俺らのキスは
肩にくいこむキスリング
- 六、山家育ちの俺らの恋は
恋は恋でも女もつてこいよ
女は女でも俺の女は
可愛い赤銅鈴之助

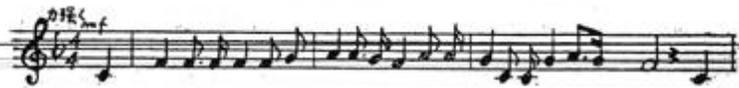
蔵王の山男

- 一、色は黒いが気はやさし
胸にフアイトの灯がともる
畑にはボロをまとえども
おいら蔵王の山男
ああ楽しき我が心
- 二、お花畑で見る夢は
遠いカンチエかマナスルか
ザイルさばいてあの壁を
おいら蔵王の山男
ああ楽しき我が心
- 三、なだれとどろく雪道を
たどりや春風 我がほほに
シールはずして 雪だるま
おいら蔵王の山男
ああ楽しき我が心

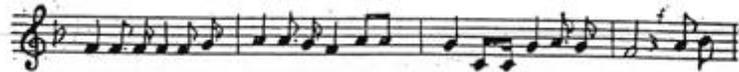
北岳の歌

- 一、思いはるか北岳の
憩いの峰に集いたる
吾らが友よ高らかに
いざや歌わん
リードハイマート
- 二、吹雪に暮れる日もすぎて
仰ぐ青さよ吾が心
今こそ目指すはバットレス
鳴れよハーケン
リードハイマート

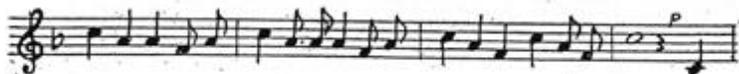
山の王者



1. あらしつくあらしこそらをすべるおうじやあ
2. いちハイカニハルケクモワレニナニカアラシコ



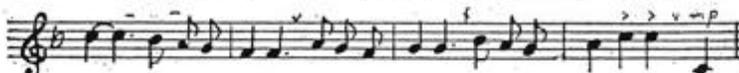
れのはゆるおじしにひやくじゆういちふるうヒマ
オリハイカニカタクモイーシハナオカタシモン



ラヤめざすわれらはやまのおうじやとならんち
クニイカニハダシクモワレラヨクシノパンツ



からのかざりわがのぞみとげん ti-ral-la
ロキイシモテイタダキキワメンテイララ



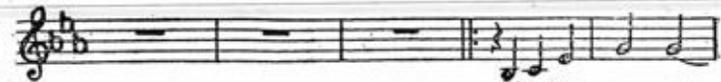
la, ti-ral-la la ti-ral-la la, ti-ral-la la hoi hoi! ち
ラーテイラララーテイラララーテイラララホイホイッ



からのかざりわがのぞみとげん
ロキイシモテイタダキキワメン

ビレネエの山の男

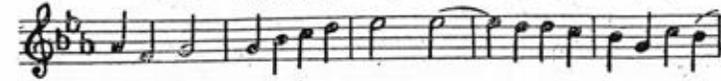
西条八十作詩
古賀政男作曲



ビレネエの



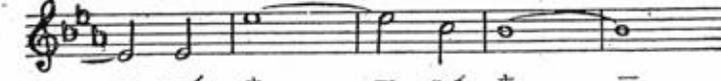
—やまのおとこは—いつもひとり—くもの



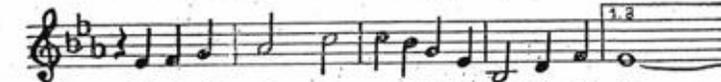
なかで—きりにぬれ—ほしをながめて



—ものし—わす—きるはもみのき



—ハイホ—ハイホ—



せんねんの—ふるしこけのき

ビレネエの山の男

二、ビレネエの

何時も一人 山の男よ

雨降れば 何を想う

ひげ撫でて 小屋の小鳥に

ハイホー 昔を語る

思ひ出の 愛の駒鳥

三、ビレネエの

春は行き 山の男よ

角笛は 夏が来るよ

旅馬車は 風に流れて

ハイホー 今日も急ぐよ

故郷の おまえの町へ

標高一万十余尺

一、標高一万十余尺

槍の穂先に 朝日がさせば
並ぶ山々 皆目をさます
雲の切れ間に笑顔出す

二、ザイルさばきは穂高か劔

山は男の修練場
南御岳 北立山は
六根清浄の鈴がなる

三、花は白馬 五色ヶ原よ

雲の平は 杉の並
とけた清水を あつめて流す
谷は岩漁の 踏み場所

四、標高一万十余尺

槍の穂先に 夕日がさせば
飛弾の夜風が はだえに寒い
ルリの天井に 星が出る

富士山見たら

たびのそらからふじさんみたら
とおい故郷のあの娘をおもた
たびの空からみた富士山は
遠い故郷のあの娘に似てる
いなかそたちとわらわいでもらお
あの娘だけかいやさすがた

槍や穂高は

一、槍や穂高は たそがれて
紫流る、雪の谷
お花畠に 花の香匂う
夜の山小屋 灯がともる
恋しアルプスの 乙女の夢よ

二、昨日ザイルを 肩にかけ
嶺を渡った 旅人が
越えたあの尾根 緑にかすむ
深山りんどうの 夢悲し
恋しアルプスの 乙女の夢よ

守れ権現 (山の歌)

北原白秋 詞
中山晋平 曲



まもれごんげーんよあけよきりーよ



やーまはーいのーちのーみそーぎばし

ろくこんしようじよう

お山は晴天

- 一、守れ権現夜明よ霧よ
山は生命のみそぎ場所
- 二、行けよ荒くれれどん登れ
夏は男の度胸だめし
- 三、何を奥山道こそなけれ
水も流れるとりもなく
- 四、馬子は追分木樵は木やり
朝は裾野の放れ駒
- 五、風よ吹け／＼笠吹きとばせ
笠は紅緒の荒結び
- 六、雨よ降れ／＼さんざとかかれ
肩の着ごさも伊達じやない
- 七、山は百万石木がやの波よ
木がや越ゆればお花畑
- 八、雪の御殿に氷の岩屋
流は千丈の逆落し

ライダーズ インザ スカイ

一、町を離れて 野に山に

行く手定めぬ おれ達は

夕べの星みりや しみじみしのぶ

遠い昔の 物語

三、はかない恋に 泣いたとて

山鳥とびたつ 朝がくりや

おれ達の心は 喜びにあふれ

群れたつ鳥は 夢をよぶ

二、可愛あの娘は良家の お嬢さん

おれはしがない 山鴉

山を歩いて なくさめる

笑つてくれるな お月さま

四、暗い谷間を さかのぼり

峠の縁に 出たときは

そびゆる白い あの峰に

向つて大きな あくびした

ワングルズンドコ節

- 一、破れズボンにドタ靴はいて
肩で風きる おいらの姿
だてじや出来ない ワングル暮し
山の男はつらいもの
トコズンドコステテコく
- 二、汽車は出て行く東京の町を
可愛いあの子がまぶたに浮ぶ
あすは南か 秩父の峰か
本の根枕の渡鳥

新人哀歌

- 一、嫌だ嫌だよワングルは
お偉い顔した人ばかり
一つや二つの年ちがい
どうしてそんなに偉いのか
- 二、部長先輩雲の上
三年四年はお偉くて
二年のガキ共山の上
お出の大将でたいばり
- 三、えぱりなさるな二年生
一年無駄めし先にくい
そろいもそろつてごくつぶし
一年前を忘れたか
- 四、パイプくわえてのし歩き
あごでしゃくつて指図する
リーダーと立ればつけあがり
屋敷ばかりが能じやない

ワングル・ポルカ

- 一、ゆううつな時も辛い時も
皆の顔見りや愉快になる
われわれワングラ〜
楽しい仲間ホンニ素しい山の友達
- 二、お腹がへつてバテた時も
メンだと聞いたたら元気になる
(以下繰返す)
- 三、雨もりテントに傘さして
ガンバリ通した夜もあつた
- 四、汚いドタ靴はいても
心はお山の雪のよう
- 五、何が欲しいと尋ねたら
何もいらぬお山があれば

ワングルズンドコ節

- 三、テントしよわされケツはたかれて
アゴを出します胸つきながら
登りや峻線頂上も近し
ヤツホヤツホの声がする
- 四、いやじやありませんかワングル食堂
ガンタキジメシヤキメシ オヤジ
今日もくじらのゲツプが出れば
ホームシツクも無理じやあない

山小屋の灯

軽快に急がずに

米山正夫作詞 作曲

たそがれの ともしびは ほのかに
 ともりて なつかしきやまごや
 はふもとのこみち よおもい
 でのまどにより きーみを
 しのべばかぜは ーすぎしひ
 のうたを ばささやくよ

山小屋の灯

59

一、暮れゆくは白馬が 穂高は茜よ
 権の木はの白き 影もすれゆく
 寂しさに君呼べど わが声むなしく
 はるか谷間より こだまはかえりくる

三、山小屋の灯は 今宵ともりて
 ひとりきくせせらぎも 静かにふけゆく
 憧れは若き日の 夢をのせて
 夕べ星のごと みに空に群れ飛ぶよ

古びし我が山の小屋

中位の速さ

アメリカ西部民謡

みすぼらしくともこころやすけ
 くひごとのかてはまずしく
 ーふしどをめぐりてねずみたわむ
 るふるびしわがやまのこや
 ーまるきのはしらにガラスなきま
 どやねよりもれくろふぶき
 ーこーやをさまよううえしおおか
 みふるびしわがやまのこや

60

山の村よさらば

スイス民謡

うるわしくすみよいやまのむらか
らとおいよそのくにへわれ
はたびゆく La la la la la
la la la la la la la la la
la la la la la la la la la

一、うるわしく住みよい
山の村から
遠いよその国へ
われは旅ゆく。

二、いとしい娘ごよ
手をさしのべよ
はるかに君の幸
神に祈ろう。

穂高よさらば

1. 穂高よさらば またくる日まで
奥穂に映える茜雲
かえり見すれば遠さかる
臉に残るジヤンドルム

2. 洞沢さらば またくる日まで
横尾に続く雪の道
かえり見すれば遠さかる
臉に残る屏風岩

3. 穂高よさらば またくる日まで
北穂に続く雪の道
かえりみすれば遠さかる
臉に残る槍ヶ岳

4. 岳沢さらば またくる日まで
前穂を後に河童橋
かえり見すれば遠さかる
臉に残る畳岩

山への別れ

Moderato con affett

スイス山唄
E.シエルマン作
諸井昭二訳詞編曲

ふるさと のまぎばよいとしのおとめ
よそれではおわかれだやまよわがいえ
よ ララー ラー ラ ラララ ララー ラー ララ
ララララー ラー ラー ラー ラー ラー ラー ラー ラー ラー

山への別れ

一、故郷の牧場よいとしの乙女よ
それではお別れだ山よわが家よ
ラ……ラ……

二、愛らしの乙女よ君に幸あれよ
再びかえるまで遙かに祈らん
(繰返し)

いつかある日

いつかある日	山で死んだら
古い山の友よ	伝えてくれ
母親には	やすらかだったと
男らしく死んだと	父親には
伝えてくれ	いとしい妻に
俺が帰らなくとも	生きてゆけと
息子達に	俺の踏跡が
故郷の岩山に	残っていると
友よ山に	小さなケルン
つんで墓にしてくれ	ピッケルたてて
俺のケルン	美わしいフェイスに
朝の日が輝く	広いテラス
友に送る	僕のハンマー
ビトンの歌う声を	聞かせてくれ

山の大尉

- 一、山の大尉は傷ついた部下の山岳兵たちに
もう一度ここで会いたいと思たえだえにことずけた
- 二、部下の山岳兵はことずけた
「靴がないので歩けない」
「靴をはいてもはかんでも山岳兵に会いたいと」
- 三、陽はさしのぼる山の朝
山岳兵はおとずれた
「大尉どの何の命令です
われらはここにつきました」
- 四、「わたしの体を五つに」
切ることを命じます
第一の切はイタリヤ皇帝に
部下の兵の記念にと」
- 五、「第二の切は連隊に
大尉であつた記念にと
第三の切はわが母へ
息子の兵の思出に」
- 六、「第四の切は恋人へ
わが初恋の思い出に
最後の切は山山へ
バラで山をおおう為」

氷のゆりかご

ねむー たいん です おとーうーさん
いちにち ふぶきとー たたーかつ て ラッセ
ル したけど むだ でした
おとーうーさん とともーつかれてーね
む た いん で す

- 二、生きたいんです
お父さん
白いきびしい
山にきて
生きてる喜び
知りました
お父さん
祈つて下さい
生きたいんです
- 三、泣きたいんです
お母さん
シラフザックは
びしょぬれで
足の感じが
ないんです
お母さん
心細くて
泣きたいんです

針ノ木岳遭難の歌

一、吹雪は止みて 月は出でぬ
とほそほとほと打つは風か
ほだび悲しく燃ゆる夜半に
帰れ友よ 我は待てり

二、昨日は此処に在りし面影
昨日は此処に在りし声音
今は涙の心の小屋に
帰れ友よ 母は待てり

三、我等七人 生きながらえて
空しく雪の上をさまよう
血肉は破れて声はかれぬ
山は毒いぬ うしき子等を

四、北アルプスの雪の嶺に
解けて流るる春となれば
咲けよ駒草朱に染めて
若き四人の 霊のために

挽歌の山

1. 山で死ぬ奴はよ 馬鹿だよと
言たおまえが 何故死んだ
俺を残してただひとり
霧の谷間に消えた影
ア—ア—
切れたザイルが目には浮かぶよ
2. 山で燃やしたよ 友情よ
山でなくしたよ 雪の朝
若い四つの足跡が
いつか二つの尾根伝い
ア—ア—
俺は泣き泣き駆けおりたよ
3. ダビの煙が 目にしみる
山の筋も すすり泣く
二度と山には登るまい
それがせめての手向けだよ
ア—ア—
清い谷間の花と咲けよ

泉のほとり

ア・ルイモフ 作詩
ア・ノヴィコフ 作曲

いずみにみずくみにきて むすめらがはなしてい
たわかものがここにきたら つめたいみずあげましょ
う みどりのまきばにひげづらのへいし がやつてき
て つめたいみずが のみたいとむすめたちにたのん
だーうつくしいむすめさん ひげ
ずら をみる なへいしにやひげもわる
いものじゃないわたしはよりきなわかも

バイカル湖

のほとり

- 一、豊かなるザバイカルの
果しなき野山を
やつれし旅人が
あてもなくさまよう
- 二、戦いやぶれて
つながれしひとやを
暗い夜のがれて
この道をあゆむ
- 三、バイカルのほとりに
ただずむ旅人が
くだり世をのろいて
かなし歌うたう

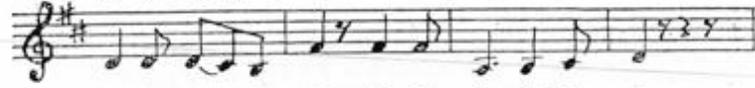
美しい湖水

- 美しい湖水よ
緑なす木立よ
新しい感激に
いつも満ちたキャンプよ
- わかたれし友情の火は
いままなお輝けり
なつかしい友達よ
声高くひびかせ
たのしい生活を
数々歌おうよ

琵琶湖周船の歌



1. われはう-みのこさす-ら-いのた



びにし-あればしみじみと



のぼるさざりやさざなみのし



がのみ-やこよいざさらば

琵琶湖周船の歌

二、松は緑に 砂白き

お松が里の 乙女こは

赤い椿の森蔭に

はかない恋に なくとかや

三、波のまに／＼ 漂えば

赤い泊火 なつかしみ

行方定めぬ 波枕

今日は今津か 長浜か

四、瑠璃の花園 サンゴの宮

古い伝えの 竹生鳥

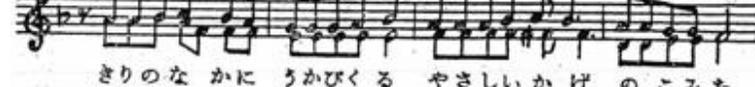
仏の御手に 抱かれて

眠れ処女子 安らけく

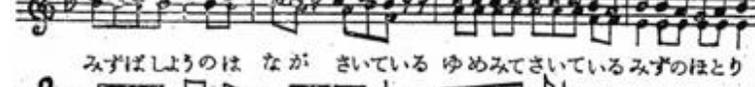
夏の思い出



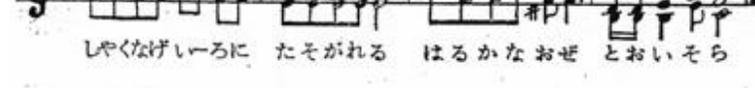
なつがくれば おもいだす はるかなおせ とおいそら



きりのなかに うかびくる やさしいかげのこみち



みずばしうのはなが さいている ゆめみてさいているみずのほとり



しやくなげしーろに たそがれる はるかなおせ とおいそら

一、夏が来れば思い出す

はるかな尾瀬 遠い空

霧の中にうかびくる

やさし影野の小径

水芭蕉の花が咲いている

夢みて咲いている水のほとり

石楠花色にたそがれる

はるかな尾瀬 遠い空

二、夏がくれば思い出す

はるかな尾瀬野の旅よ

花のなかにそよそよと

ゆれゆれる浮き島よ

水芭蕉の花が匂っている

夢みて匂っている水ほとり

まなこつぶればなつかし

はるかな尾瀬 遠い空

ジグーリー

Moderato Grave

ロシア民謡

かわもきりたちのべにながれ
てつらなるやまはおゝジグリーのみね
よつらなるやまはおゝジグ
リのみねよ (2) オブリのみねよ

1. 川面霧立ち 野辺に流れて
連なる山は おゝジグリーの峰よ。
2. 小舟静かに 水面をゆれて
うるはし山は おゝジグリーの峰よ。
3. 母なるヴォルガに 春を迎える
栄えあるつとめ おゝジグリーの峰よ。
4. あふるゝ水は もすそを洗い
海は近づく おゝジグリーの峰よ。
5. 舟は波間を 海に向う
霧に連なる おゝジグリーの峰よ。

川岸のベンチで

ともしびまたたき つきは
みずにゆれかわぎ
しでかたるわかも
のとおとめかわぎ
めよ

- 一、灯またたき
月は水にゆれ
川岸でかたる
若人と乙女
- 二、若者のひとみ
明るく輝き
乙女の黒髪
そよ風にゆれる
- 三、真夏の夜空に
きらめく星影
若き日の幸を
静かにささやく
- 四、白樺の木かげ
川辺のベンチで
別れの言葉を
いえない二人よ

カチューシャ

イサコフスキー 作詞
ブランテル 作曲

りんごのはなほころびかわ
もにかすみだち きみなき
さーとーにも はるはしのびより
ぬ きみなき さーとーにも
はるはしのびよりぬ

1. リンゴの花ほころび 川面にかすみたち
君なき里にも 春はしのびよりぬ
2. 岸辺に立ちて歌う カチューシャの歌
春風やさしく吹き 夢が湧くみ空よ
3. カチューシャの歌声 はるかに丘を越え
今なお君をたずねて やさしその歌声
4. リンゴの花ほころび 川面にかすみたち
君なき里にも 春はしのびよりぬ

北上川

においかぐわし しーらゆーりのぬ
れているよな あのひとみー
おもいだすのは おもいだすのはき
たかみが わらのせーせらぎよー

- 北上川
- 一、においかぐわし ぬれている様な あの瞳
北上川原の せせらぎよ 思い出すのは
 - 二、銀河の流れを みつめては
星くす数えし 君と僕
北上川原の 月の夜 思い出すのは
 - 三、雪のちらちら 降る夜に
あなたは招かれて 天國へ
北上川原の 雪の夜 思い出すのは
 - 四、僕は生きるのだ 生き抜くぞ
あなたの面影 胸に秘め
北上川原の 思い出すのは

桜 貝 の 歌

一、美しき桜貝ひとつ
去り行ける君にささげん
この貝は去年の浜辺に
我れ一人ひろいし貝よ

二、ほのぼのと薄紅染むるは
我が燃ゆるさみし血潮よ
はるばるとかよう香りは
君恋うる胸のさざ波

あゝなれど
我が想いははかなく
うつし世の
なごさに果てぬ

椰子の実

一、名も知らぬ 遠き島より
流れよる 椰子の実一つ
ふるさとの 岸をはなれて
汝はそも波に幾月

二、もとの樹は生いや茂れる
枝はなお 陰をやなせる
われとまたなごさを枕
ひとり身の浮寝の旅ぞ

三、実をとりて胸にあつれば
あらたなり流離のうれい
海のひの沈むを見れば
たぎりおつ異郷の涙
思いやるやえのしおじを
いずれの日にかくにかえらん

小さな竹の橋で

ちい さな はし よ た け の は も の じ た
 - か わ の み ず に - - な が れ て ゆ
 く - - あ の ひ の ゆ め も
 - た の し お も い で も - か わ の
 み ず に - - な が れ て ゆ く
 - な が い と し も つ き - い - ろ

とりどりに - やがて はきえて
 ゆく - あかい ぼらの はなび
 ら ちいさな はしよ - たけのはしの
 した - こいも ゆめも -
 - ながれて - ゆく -

バリバリの浜辺にて

On the Beach at Bali-Bali

Temp hulo

It hap-ped on the beach at Bal-i Bal-i - I
 found her drea-ming on the gold-en sands - It
 hap-ped on the beach at Bal-i Bal-i - It
 was not long till we were hold-ing hands And
 while we strol-led a long the beach toge-ther - We
 kissed and the she prov-ided to be wine - you
 could have kno-clsed we over with a fea-ther--When she

バリバリの浜辺にて

バリバリの浜辺であつたきれいな
きれいな人あまたの人の中でも
ひときわすんだひとみわたしは
わすれられないいくとも夢に
みてはいつでもこいしく思う
なやまし海の女王
あの浜辺にいつても二度とは
逢えぬバリバリの浜辺も
つまらなくなつたよ
ひとみのきれいな人はいまごろ
どこかでだれかをなやまして
そうだよきつとそうだよ

マウイ ワルツ

一、夏が来れば 思い出す

月の浜辺 青い海

二、あゝまた逢える 砂浜で

南の唄を 歌おうよ

三、マウイ娘 パラ娘

明日は誰方の レイを編む

四、沖を遙か 船が行く

夢をのせて 何処へ行く

海女の子供

うみにうまれば うみにゆく
あまのこどもは しまもた
ひねもすふねの ゆりのこに
ゆられゆられ ゆられゆられ

海女の子供

一、海に生れて 海に行く

海女の子供は 今日もまた

ひねもす舟の ゆりかごに

ゆられゆられて 波の上

二、波をくぐりつ 藻をわけつ

母が獲物を あさる間に

子供は舟の ゆりかごに

ゆられゆられて 波の上

三、夕日を浴びて 帰えり行く

舟のへさきに 散る波と

静かにきしる 櫓の音は

海女の子供の 子守唄

海よさらば

一、嵐去り星くずゆれて
見はるかす暁の海
太陽は昇り雲は流れる
水の果てに水の果てに
帰らぬ友よ
逝きて帰らぬ友よ何処
あ……友よ友よ何処

二、雨しぶき光はみえず
奮い立ち向かいし友よ
力尽きて船は破れ
波の果てに波の果てに
帰らぬ友よ
逝きて帰らぬ友よ何処
友……友よ友よ何処

三、恋しきは海のふるさと
歌いしはしぶきと風と
彼こそはわむりの秋
今ぞ永遠に今ぞ永遠に
海よさらば
恋しふるさと海よさらば
あ……海よ海よさらば

浜千鳥

一、青い月夜の浜辺には
親をさがして鳴く鳥が
波の国から生れ出る
濡れた翼の銀の色

二、夜鳴く鳥の哀しさは
親をたずねて海こえて
月夜の国へ消えてゆく
銀の翼の浜千鳥

浜辺の歌

一、あした浜辺をさまよえば
昔のことぞしのぼるる
風の音よ 雲のさまよ
寄る波も貝の色も

二、ゆうべ浜辺をもとおれば
昔の人ぞしのぼるる
寄する波よ かえず波も
月の色も星のかけも

三、はやたちまち波が吹き
赤裳のすそぞぬれもせし
病みし我はすでにいえて
浜辺の真砂まなこいまに

心の歌

行進曲風に 快活に

関 忠亮 作詞作曲

G D7 G C A7 D G

1. ふる さとのやまを みよも みじいろは え て ふる
 2. いく さにあれはて るも みどり またら えき おかも
 3. さわ どむきの はたけ は わぢら にあらしきむ とど
 4. やか れしこのまーちも みどかーぜきむものよ
 5. ふる さとのやまもれ みど りよわかものよ
 6. じゆ うのひにかが やけ ふる さとのつらよ ひー

E7 A7 D7 G C D7 G

さとのかわもは うつつすきよき そのかーげ
 なまきこたちもいらまはわか ものとななる
 めのうたーかわらねど うみはすたになくる
 ろくはうがのおとをまた つたえくくるさ
 れをけにーごらすーなむすめわかー
 ひけへいわを あいすこころーのうた

E7 A7 D7 G C D7 G

ふる さとのかわもは うつつすきよき そのかーげ
 おやなまきこたちもいらまはわか ものとななる
 かもめ のうたーかわらねど うみはすたになくる
 とどろくはうがのおとをまた つたえくくるさ
 ながれをけにーごらすーなむすめわかー
 ひーびけへいわを あいすこころーのうた

彷徨の唄

そんなに おまえは なぜ なげく

くさのしとねにねころんでー

わたしの ゆうこと おきき あれ

ひとの うきよの みえをすて

1. そんなにおまえはなぜ嘆く 草のしとねに寝ころんで

私のいう事お聴きあれ 人の浮世の見栄を捨て

2. 口笛吹いて気を晴らせ うつつの夢を見ていあれ

くたびれ休めに山を見て 腹がへつたらまた歩け

今日は野越え

- 一、今日は野を越え 明日山越えて
限り知られぬ わが旅よ
- 二、山は男か みそぎの場所よ
下ははるばる 山幾重
- 三、夏は直昼の お山の谷へ
しばし憩えば 百合が咲く
- 四、可愛い花なら 摘みもできず
涙ながらに 西東
- 五、冬の山見りや 心がはずむ
去冬の出湯の 里恋し
- 六、明日は吹雪か 北風夜風
雪にやけたる 身にしみる
- 七、守れ権現 我らが旅を
明日の旅路が 気にかかる

旅の歌

作詞作曲者不明
中野靖子編曲

しょうも しずか にくれて
ヒョッテ に ともし びともる
いろり - かこみお - もい は - て なし
あした は い ずこの みねか

- 旅の歌
- 一、今日も静かに 暮れて
ヒユツテに灯 ともる
いろり囲み 想いはてなし
あしたはいずこの 峰か
- 二、あわれはかなき 旅よ
人はみな 旅人か
何を嘆き何をか いたむ
憧れの 峰こえて
- 三、夢は 昔にかえり
えにし山川 をなし
そぞろ一人 うきねの旅路
あしたはいずこの 峰ぞ

北 帰 行

1. 窓は夜露に濡れて 都すでに遠のく
北へ急ぐ旅人ひとり 涙流れてやまず
2. 健大一高旅行 追われ鬨を去りゆく
くめど尽きぬ恨みの苦杯 あゝ乾すによしなし
3. 我れを容るゝに狭き 国を去らんとすれば
せめて名残りの花の小枝 尽きぬ恨みの色よ
4. 富も名誉も恋も 遠きあこがれの国
淡き望みはかなき心 榮光我れをば去りぬ
5. 我れは黙して行かん 何をまた語るべき
さらば祖国我がふるさと 明日は異郷の旅ぞ

蒙古彷徨の歌

心たけくも鬼神ならぬ

人と生れて情はあれど

母を見捨てて波こえて行く

友よ兄等と何時また逢わん

波の彼方の蒙古の砂漠

男多恨の身の捨て所

胸に秘めたる大願あれば

生きて帰らん望は持たじ

朝日夕日を馬上に受けて

続く砂漠の一筋道を

大和男子の血潮を秘めて

行くや若人千里の旅路

アルト・ハイデルベルヒ

一、遠き国よりはるばると

ネッカーの流れ懐かしみ

岸にいませり我が君に

今ぞささげんこの春の

見目美しき花飾り

二、いざや入りませ我が家に

されど去ります日もあらば

忘れ給うな若き日の

ハイデルベルヒの学舎の

幸多き日の思い出よ

旅 愁

(Dreaming of Home and mother) アメリカ民謡
modrato semplice 犬童球溪訳詞

ふけゆく あきのよ たびのそら一の
わびしきお もいに ひとりなやむ
こいしや ふるさと なつかしちーちはは
ゆめじにた どの は さとの いえじ
ふけゆく あきのよ たびのそら一の
わびしき おもいに ひとりなやむ

旅 愁

犬童球溪訳詞

二、窓うつ嵐に
夢もやぶれ
はるけき彼方に
心まよう
恋しやふるさと
なつかし父母
思ひに浮ぶは
杜の木ずえ
窓うつ嵐に
夢もやぶれ
はるけき
彼方に心まよう

知床 旅情

一、知床の岬にはきなすの咲く頃
想い出しておくれ俺達のことを
飲んで騒いで丘に登れば
はるか国後に白夜は明けぬ

二、旅に疲れが酔うほどにさまよい
浜に出てみれば月は照る波の上
今宵こそ君を抱きしめんと
岩影に寄ればピリカが笑う

三、別れの日はまだラウスの村にも
君は出て行く岬を越えて
泣いてくれるな愛しい乙女よ
私を忘るな白いかもめよ

あゝふるさと

一、火の山の ふもとの村よ
なつかしき ふるさと
花に木に 梢のとり
光みてる わがさと

二、唐松の 林をぬけて
岩清水 湧くほとり
白樺は 白く気高く
狭霧に ぬれて立つよ

三、みどり濃き 牧場のさくに
たたづめる 若き日は
牛よ馬よ 真白き雲か
あこがれ のせて行くよ

四、空の果て 旅立ち行けど
何時の日か 帰ってくる
火の山の のふもとの

ぼくらの故郷

なつかしあやま ファリアファリ
 ましろーき もーりに
 うさぎーた わむる ファリアファリア
 ファリアファリア ファリアファリア

一、懐しあゆ山 ファリアファリア
 僕等の故郷 ファリアファリア
 真白き森に うさぎたわむる
 ファリアファリアファリア
 ファリアファリアファリア
 二、めぐり来し雪山 ファリア
 僕等の故郷 ファリアファリア
 粉雪かむる もみの木うれし
 ファリアファリアファリア
 ファリアファリアファリア
 三、まぢかねし冬の日 ファリア
 僕等の故郷 ファリアファリア
 谷間の小舎にストーブもえる
 ファリアファリアファリア

ふるさとの歌

一、ふるさとの空を
 あおぎみよう
 ふるさとの空は
 うつくしい
 私の望みを
 いつの日も
 まもつてくれる
 ふるさとの空

二、ふるさとの歌を
 きいてみよう
 ふるさとの歌は
 なつかしい
 心に勇気と
 しあわせを
 はこんでくれる
 ふるさとの歌

三、ふるさとの緑
 みつめよう
 ふるさとの緑
 たたえよう
 私とあなたと
 みんなして
 つくつた緑
 ふるさとの幸

四、ふるさとの太陽
 だきしめよう
 ふるさとの太陽
 この胸に
 みんなの夢を
 あたたく
 つつんでくれる
 おおきな光

心の窓にともし灯を

一、いじわる木枯し 吹きつける
古いセーター ぼろシニーズ
泣けて来るよな 夜だけど
頬つべをよせて ともしましょう
心の窓に ともし灯を
ホラ笑くぼが浮んで来るでしょう

二、真珠に輝く飾り窓
うつる貧しいシンデレラ
ボツケにやなんにもないけれど
かじかむ指でともしましょう
心の窓に ともし灯を
ホラ 口笛吹きたくなるでしょう

三、暖炉をかこんだ唄声
遠きいてる細い露地
ちつちやな焚火は消えたけど
お空をみつめともしましょう
心の窓に ともし灯を
ホラ希望がほのぼの湧くでしょう

里の秋

一、静かな静かな 里の秋
おせどに木の実の 落ちる夜は
あかあさんと ただ二人
栗の実煮てます 囲炉裏ばた

二、明るい明るい 星の空
鳴き鳴き夜鶉の 渡る夜は
ああ父さんの あの笑顔
栗の実たべては 思い出す

三、さよならさよなら 椰子の島
おふねにゆられて 帰られる
ああ父さんよ 御無事でと
今夜も母さんと 祈ります

母さんのうた

かあさんがよなべをしててぶくろあんてくれ
たこがらしふいちづめたかろうてせつ
せとあんだだよふるさとのは
とどくいろいろのにおいがした

2. 母さんは麻糸紡ぐ 一日紡ぐ
おとうは土間でわら打ち仕事 お前もがんばれよ
故郷の冬は寂しい せめてラジオ聞かせたい
3. 母さんのあかぎれ痛い 生味噌をすりこむ
根雪も解けりゃもうすぐ春だて 畑が待ってるよ
小川のせせらぎが聞える 懐かしさがしみとおる

谷間の灯

たそがれにわがやのひー—まど
 にうつりしとき—わがこかえ
 るひいのる—おいしははのすがた
 —たにまひともしころ—いつ
 もゆめにみるは—あのひあのまどこ
 ひし—ふるさとのわがいえ—

峠の我が家

中庸の速さ

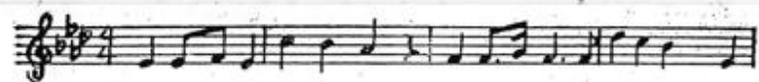
イギリス 民謡
 おさほるを編曲

そらはあおくみどりののべなつかしの
 わがまど かなしみもうれ
 いもなきはほえみのわがいえ
 おお ふるさとさ—とみみになれ
 しことば—むれあそぶひつ
 じのむれはれ わたるこのそら—

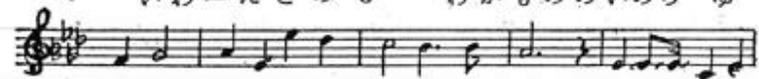
- 一、空は青く緑の野辺
 懐しのわが家
 悲しみも憂いもなき
 微笑みのわが家
- (折返し)
 おゝ故郷
 耳になれし言葉
 むれ遊ぶ羊の群
 晴れ渡るこの空
- 二、花の香り流れに沿い
 鼻白き水鳥
 夢のごと静かにまた
 さわやけく真白に
- (折返し)
 三、空は澄みて
 さやかに吹く
 そよ風かくわし
 懐しき峠の家
 またとなき故郷

祝えこの日

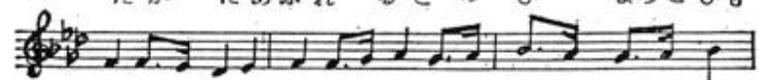
岡田京子 詞
和の芽コーラス 編曲



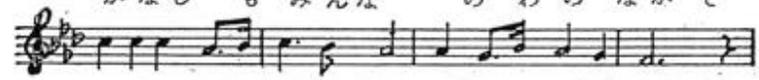
いわ—えこのひ わかものいのちゆ



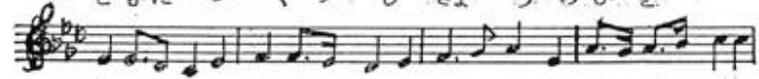
たかにあふれるこのひ よろこびも



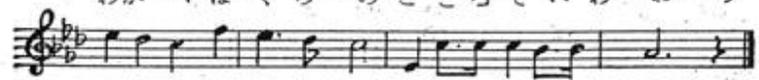
かなしもみんなのわのなかで



ともにつ—くりしきよ—うのひを



わか—いぼくら—のこころでいわ—お—う



あずのかどでをはげましあお—う

つなげ手と手 がっちりと

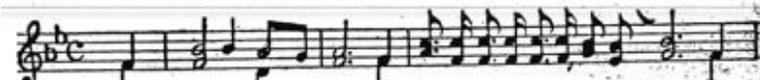
うでくみ 堅い絆結ぼう

喜びも悲しみも みんな一諾の輪の中で

共にきずこう 明日の日を

若い僕らの心で祝う 明日の門出を励まし合おう

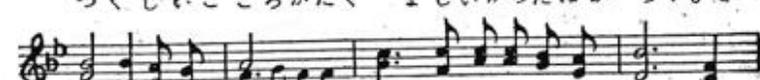
若者よ



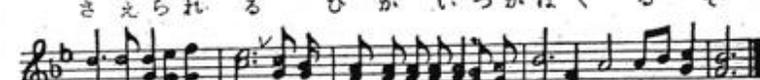
わかも—の—よからだをきたえておけ—う



つくしいところがたく ましいからだにからくもさ



さえられるひがいつかはくるそ



のひのためにからだをきたえておけわかも—のよ

若者よ

身体を鍛たえておけ

其の日の為に

いつかは来る

からくも支えられる日が

美しい心がたくましい身体に

身体を鍛えておけ

若者よ

若者よ

君が若者なら

Em B7 Em Em7 Am B7
 どこへゆくかとたずねるひとにみちのむこうのあさ
 Em Em B7
 ひをゆびさす あいにゆくのさはつ
 Em Em7 Am B7 Em
 こいのひとホラあ のやまがほくのあのこさあ
 Em B7 D7 G7
 さあすも うきみがわかものならあし
 Am B7 Em B7 Em
 たへつづくこのみちを

男ならやってみな

一、男なら男なら胸に血潮が高鳴りやせぬか

祖国日本の再建になう若き血じやもの肉じやもの

男ならやってみな

二、男なら男なら生れてきた時や裸じやないか

死んで行くにも裸じやないか生きている間にと仕事

男ならやってみな

三、男なら男ならこらでひとつ禪しめて

可愛い件や娘や孫に明るい社会にして渡せ

男ならやってみな

四、男なら男なら武器や兵器をさらりと捨てて

愛と真理の男の意気できずけ世界の平和郷

男ならやってみな

美しい青年

一、青年の瞳は美しい
それは希望に燃えているからだ
青年の瞳は美しい
それは澄みわたる青空のように
平和と自由を
こよなく愛するからだ

二、青年の腕は遅しい
それは仕事に励むからだ
青年の腕は遅しい
それは銃とるためではなく
祖国を愛するものを
支えるからだ

かわいい人

一、笑うとかわいい人だった
笑窪のきれいな人だった
あなたと別れた遠い日の
おもい出の森に
ああ 今日もまた夕焼けが
赤々とくくりにじているよ

二、緑の木立に身を寄せた
笑窪に涙がひかっていた
泣くだけ泣いたそのあとの
あきらめの肩に
ああ かんさしの花びらが
はらはらくくこぼれていた

君が若者なら

一、どこえ行くかと心ねる人に
道のむこうの朝日を指さす
会いに行くのさ初恋の人
ホラ あの山が僕のあの娘さ
さあ進もう 君が若者なら
明日に続くこの道を

二、なぜ笑うかと尋ねる人に
海のむこの夕日を指さす
待つてるからさ昔の馴染み
ホラ あの海が僕の恋人
さあ進もう 君が若者なら
希望に続くこの道を

三、なぜ急ぐかと尋ねる人に
雲によんだあの空指さす
心せくのさ 霧が出てきた
ホラ あの雲は嵐の前ふれ
さあ走ろう 君が若者なら
今きた道を引き返えそう

四、なぜ帰るんだここまで来たのに
歯を食いしばりその時答える
誰か呼ぶのさまだ死なないで
ホラ あの声は俺の御袋
さあ帰ろう 君が若者なら
勇気を出して男らしく

夜明けの歌

- 一、夜明けの歌よ 私の想の
昨日の悲しみ流しておくれ
夜明けの歌よ 私の心に
若い力をまたしておくれ
- 二、夜明けの歌よ 私の心の
あふれる思いをわかっておくれ
夜明けの歌よ 私の心に
大きな望みを抱かしておくれ
- 三、夜明けの歌よ 私の心の
小さな幸せまでもっておくれ
夜明けの歌よ 私の心に
想い出させるみるさとのこと

がんばろう

- 一、がんばろう！
つきあげる空に
くろがねの男のこぶしがある
燃えあがる女のこぶしがある
斗いはここから 斗いは今から
- 二、がんばろう！
つきあげる空に
輪をつなく仲間のごぶしがある
おしよせる仲間のごぶしがある
斗いはここから 斗いは今から
- 三、がんばろう！
つきあげる空に
国のうちそとのごぶしがある
勝どきをよぶごぶしはひとつ
斗いはここから 斗いは今から

懐かしい顔

こどものころにおそんで た がくせい
じだいに つきあつ た いろんなものが
いたけれど みんなみんないまはな
し あ あ なつかしい ふるいーかお

こころ - しつ た と も だ ち
は - きょうだいよりも
なつかしい おんなじ



い え に な ぜ き み は



う ま れ て き て は 一 く れ な ん だ

1. 子供の頃に遊んでた
学生時代につきあつた
いろんな友がいたけれど
くり返し { みんなみんな今はない
ああなつかしい古い顔
2. 夜おそくまですわりこみ
わらつて飲んだものだつけ
あの底ぬけののみ仲間
3. 恋もただけすばらしい
美人だつけがあの人
今じやあわれぬ人の妻
4. 心知つたともだちは
兄弟よりもなつかしい
同じ家に何故君は
生れて来てはくれなんだ
5. そうすりや今でもそばにいて
なくなつた友去つた友
うばわれた友いろいろな
昔のことを語らうに

学生時代

一、萬のからまるチャベルで祈りを捧げた日
夢多かりしあの頃の思い出を迎れば
懐かしい友の顔が一人々々浮かぶ
重い靴をかかえて通つたあの道
秋の日の図書館のノートとインクの匂い
枯葉の散る窓辺 学生時代

二、讚美歌を歌いながら清い死を夢みた
何の装いもせずに口数も少なく
胸の中に秘めていた恋への憧れは
いつもはかなく破いて一人書いた日記
本棚に目をくればあの頃読んだ小説
過ぎし日よ私の 学生時代

三、ロソクの灯に輝く十字架を見詰めて
白い指を組みながらうつつむいていた友
その美しい横顔姉のように慕い
いつまでも変わらずにと願つた幸せ
テニスコートキャンファイヤ
懐かしい日は帰らず
素青らしハあつ頁 学生時代

遙かな友に

作詞 磯部 辰
作曲 磯部 辰

しずかなよふけにいっもいつも
おもいだすのはおまえのこと
おやすみやすらかにたどれゆめーじ
おやすみたのしくこよいーもまた

遙かな友に

一、静かな夜更に いつもいつも
想い出すのは お前のこと
「おやすみ安らかに 辿れ夢路
おやすみたのしく 今宵もまた」

二、明るい星の夜は 遙かな空に
想い出すのは お前のこと
「繰返し」

三、さびしい雷の夜は 團圞りの端で
想い出すのは お前のこと
「繰返し」

人を恋ふる歌

一、妻をめとらば才たけて
眉目うるわしく情ある
友を選ばば書を読み
六部の俠気四分の熱

二、あゝ我ダントテの奇才なく
パイロン・ハイネの熱なきも
石を抱きて野に叫ぶ
芭蕉のさびを我は知る

三、花の乙女に恋すとも
色に迷うとえ言うなかれ
若き男子の胸に咲く
唐紅の花に黄つ

古い手紙

一、心のすみに捨てきつた
すぎにし恋の思い出の
古い手紙は今もなを君を
愛すと呼びかける
何故忘れられない
君の面影
手紙とともになを
我むねに残る

二、なみだのにじむページには
あ日の夢がそのままに
破れし恋の悲しみを
今もさびしく物語る
(以下一同じ)

時ふれば

一、二人の胸の　ときめき
ただひとつに打てば
わが恋こそ　とこしえにと
ゆめみし日いつこ
二、ながい月日がすぎて
恋も夢も破れて
時は二人の思い出を
浮べ流れ行く

森の小径

ほろほろこぼれる　白い花を
受けて泣いていた
愛らしいあなたよ
憶えているかい　森の小径
僕も悲しくて
青い空あおいだ
何んにもいわずに　そつと泣いてた
小さな肩だった
なつかしい思い出

ねむの木

- ① ねむの木のその下で
ほろほろ泣いた人
風もない夕暮れに
ゆれていた黒髪よ
- ② ねむの木を見下して
またたいた青い星
星よりもまだ遠い
僕達の道だった
- ③ ねむの木をひっそりと
包んだ白い霧
誰れにも知られないで
涙をふいたあなた
- ④ ねむの木の葉のように
今はただ眠ろうよ
別れても離れても
夢ならば会えるから
- ⑥ ねむの木のその下で
ささやいた永遠の愛
真珠のひとみにも
輝いたともしびよ

あさみの歌

- 一、山には山の愁いあり
海には海のかなしみや
まして心の花園に
咲きしあさみの花ならば
- 二、高嶺の百合のそれよりも
秘めたる夢もひとすじに
紅もゆるその姿
あさみに深きわが想い
- 三、いととき花よ汝はあさみ
心の花よ汝はあさみ
さだめの径ははてなくも
かおれよせめて我が胸に

愛の砂丘

- 一、空がこんなに青いのは
夕べの街をひっそりと
風が渡って行くからか
雲がこんなに紅いのは
乙女の髪に吹いていた
真紅のバラ色ゆえか
- 二、星がこんなにきれいなのは
乙女の臉に光つてた
真珠の玉の色ゆえか
道がこんなに遠いのは
別れた時のくちづけが
白い吐息となるからか

エメラルド

- 一、貴女のほほにほつつりと
僕の涙が落たつけ
月の光はエメラルド
涙の色もエメラルド
ああ あの口づけを
あの人は今もおぼえているだろうか
- 二、どうしてよいのかわからない
そつと貴女はうなだれた
白いうなじはエメラルド
こぼれる花もエメラルド
ああ あの口づけを
あの人は今もおぼえているだろうか
- 三、きれいな月の出る夜は
いつも貴女の夢を見る
ほのかな夢はエメラルド
さめても消えぬエメラルド
ああ あの口づけを
あの人は今もおぼえているだろうか

幸せはここに

- 一、秋の夜ばふけて巣だく虫の音に
つかれた心いやす我が家の窓辺
静かにほのぼのと幸せはここに
- 二、星のまたたきは心のやすらぎ
明日の夢をはこぶやさし君が笑み
静かな我窓辺 幸せはここに

罪 つ くり

1. あの時おいらは独り者
機屋にいたものさあ
かわいいあの娘をくどいたが罪つくり

夏のささやきよ 冬の語らい
霧にも露にも濡らしちゃならぬと抱いたが
罪つくり
2. 子供が出来てあの娘
ひそかにたずねて来た
お金がなくて暮せぬと二人で泣き合つた

(以下繰り返す)
3. いとしの娘は身を投げて
この世を呪い死んだ
愛の誠と形見と怒りを残す
4. 今でもおいらは独り者
息子と二人連れ
かわいいあの娘によく似た
やさしいあの娘

囚 人 の 歌

1. 舟こぐあけくれ くさりにつながれ
思いはいつか 母の面影
日毎夜毎に 涙で語つた
母の言葉を 今ぞ思う
2. 町や酒場に 倅せはない
楽しみばかり 求むるではない
だが若い日は 自由にあこがれ
翼のぞまず 生きられようか
3. 人を殺した 訳ちやない
軈を盗んだ 覚えもない
ただ毎日が 素晴らしい
祭の続きで ほしかつただけさ
4. 仕事に出かける 朝の門口に
立ちほだかつた 王の兵士ら
涙ですがる 母を足蹴に
我らをへだてた 牢獄の壁

青春牧場

サトウ・ハチロー 作詞
木下忠可 作曲

明るく

1. わか いくろ うしくろ うしー が ホイ
2. つの が ぬれたか あさつーゆー に ホイ

かわい い めうしに あのねと いった
かおきな ひとみも ひかって ぬれた

あのねの そのあと いえなんだから
どうして ぬれたか したらなんだから

二) まきばは はる な の さ

いつでも まきばは はる な の さ

- 青春牧場
- 一、若い黒牛 黒牛が ホイ
可愛い牝牛に あのねと言った
あのねのそのあと 言えなんだ
だから牧場は 春なのさ
いつでも牧場は 春なのさ
 - 二、角がぬれたか 朝露に ホイ
大きな瞳も 光ってぬれた
どうしてぬれたか 知らなんだ
(くり返し)
 - 三、遠い山々 峰の雲 キイ
空さえ毎日 若くて青い
風さえ強くは 吹かなんだ
(くり返し)
 - 四、若い黒牛 黒牛が ホイ
今夜も三日月 黙ってみてる
三日月さんとも 言えなんだ
(くり返し)

青春は雲の彼方に

猪又 良作詞
上村晴男 作曲

軽快に

1. やまーにあ こーがーれ やまなみこえ て
2. むねーもふ くーらーむ みどりのかぜ に

はるーかに みおろーす はなさくむらよ ヤッ
てせーふる あのこーは のばらかゆりか ヤッ

ホー ヤッ ホー よべば こたえる
ホー ヤッ ホー いのち もやして

あか るいこだま ああ せいしゅんーは
ふ とりもうたう ああ しあわせーは

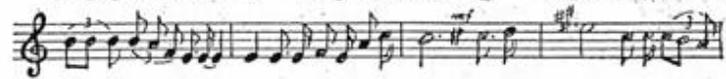
ながれるくものかな ーたーに

- 青春は雲の彼方に
- 一、山に憧れ 山脈越えて
はるかに見おろす 花咲く村よ
ヤッホー ヤッホー
呼べばこたえる 明るいこだま
ああ青春は 流れる雲の彼方に
 - 二、胸もふくらむ みどりの風に
手を振るあの娘は 野ばらか百合か
ヤッホー ヤッホー
生命燃やして 小鳥も唄う
ああ幸福は 流れる雲の彼方に
 - 三、山は夢呼ぶ 僕らの大地
ザイルにつないだ 心と心
ヤッホー ヤッホー
赤くかがやけ 夕焼け小焼け
ああ憧れは 流れる雲の彼方に

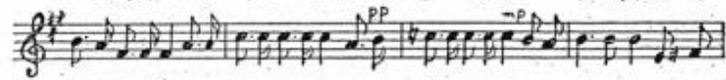
雪のふるまを



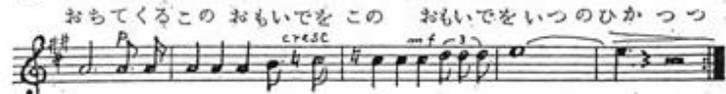
1. ゆきのふるまを ゆきのふるまを おもいでだけが



とーりすぎてゆー ゆきのふるまを とお いくにかーら



おちてくるこの おもいでをこの おもいでをいつのひかっつ



まん あた たかきし あ わせのほほえみ

- 二、雪のふるまを 雪のふるまを
足音だけが 追いかけて行く
雪のふるまを
一人こころに 満ちてくる
この哀しみを この哀しみを
いつの日か ほぐさん
緑なす春の日の そよ風
- 三、雪のふるまを 雪のふるまを
息吹きとともに こみあげてくる
雪のふるまを
誰も解らぬ わが心
このむなしを このむなしを
いつの日か 祈らん
新しき光降る 鐘の音

雪山讃歌

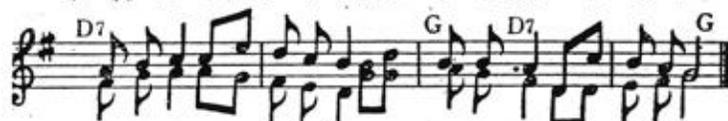
沖沢やすお編曲



ゆーきよ いーわよ われらが やどり



おれたちやまちは すめない からに



おれたちやまちは すめない からに

- 二、シールはずして バイブの煙
かがやく尾根には 春風そよぐ
- 三、けむい小屋でも 黄金の御殿
早く行こうよ 谷間の小屋へ
- 四、テントの中でも 月見げできる
雨が降つたら 濡れよばいよさ
- 五、吹雪の日には 本當につらい
ピツケル握るに 手がこごえるよ
- 六、荒れて狂うは 吹雪かなだれ
俺達やそんなもの 恐れはせぬぞ
- 七、雪のまに／＼ きら／＼光る
明日はのぼろよ あの頂きに
- 八、朝日にかじやく 新雪ふんで
今日も行こうよ あの山越えて
- 九、山よサヨナラ
またくる時には ごきげんよろしゆう
笑つておくれ

Oh, my Darling Clementine

Ref. Oh my darling, oh my darling, oh my darling Clementine.

You are lost and gone forever, dreadful, sorry, Clementine.

1. In a cavern, in a canyon, excavating for a mine, dwelt a miner, forty niner, and his daughter Clementine.
2. Light she was and like a fairy, and her shoes were number nine; Herring boxes, without toposes sandals were for Clementine.
3. Drove she ducklings to the water, every morning just at nine, hit her foot against a splinter, fell into the foaming brine.
4. Ruby lips above the water, blowing bubbles soft and fine; Alas for me! I was no swimmer, so I lost my Clementine.

白い思い出

- 一、雪が降ってきた
ほんの少しだけど
私の胸の中に
積りそうな雪だった
幸せをなくした
黒い心の中に
冷たく敲しい
白い手が偲び寄る
- 二、雪が解けてきた
ほんの少しだけど
私の胸の中に
残りそうな雪だった
灰色の雪が
私に教えてくれた
明るい陽射しが
すぐそこにきていると

トロイカ

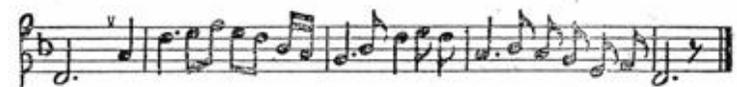
ロシア民謡



ゆきのしらかばなみきゆーひがはえ



るはしれトロイカーほがらかにすずのねたか



くはしれトロイカーほがらかにすずのねたかく

- トロイカ
- 一、雪の白樺並木
夕日が映える
走れトロイカほがらかに
鈴の音高く
- 二、響け若人の歌
高鳴れバイセン
走れトロイカかろやかに
粉雪けつて
走れトロイカかろやかに
粉雪けつて
- 三、黒い瞳が待つよ
あの森こそば
走れトロイカ今宵は
楽しいうたげ
走れトロイカ今宵は

シユスブン

すごいぞ今日の調子シユスブン! できたぜ
 クリスマスアシユスブン! うそとおもうならあした
 みせよう 本当の はなしさ シユスブン!

冬の幸

行進曲の速さ

スキーをか たにや まにゆかん 奴
 ばたに ふゆの さちあら 々の やまは ゆ
 きのよせい つ めたき かぜもさわやか

オーシーハイル

一、いわきおろしがふくならふけよ
 やまからやまえとわれらははしる
 昨日はボンジュネ
 今日又アジセウ
 煙立てつつ
 オーシーハイル

二、ステップタンすりや
 たわむれかかる
 杉の梢の未練の雪よ
 心残りをエールに止め
 屈身滑降で
 オーシーハイル

三、夕日はあか、あか シユブル染めて
 たどる雪道 果てさえ知れず
 街にはちらほら 灯がついた
 ラッセル急げよ
 オーシーハイル

僕のスキー

一、僕のスキーはウイスキー
 町の酒場をスラローム
 旗門旗門にひつかかり
 ついた学校ダウシヒル

二、いやがる親爺を無理矢理に
 スキーすべりにさそつたら
 すべつて舌をカンダハ
 殺すスキーかどやされた

三、雪の女王とおだてられ
 無理して買ったヒツコリ
 一度もはずかに盗まれた
 油断もスキーもありません

四、僕はヒュツテのヨツク長
 ジャンプ料理は得意だが
 窓の料理はテレマーク
 変てんこまてんこ

ヒユツテの夜

深田久弥作詩
(ゆるくしづかに)

高木東六作曲
小川一郎編曲

Hum -----

ニキノアオツラトオスマド ヌグニコオツタ ハナガラス

ヌクメタニヒヂジワカケバ ソコカラトケテ アトモナーク

cresc *f* *boeucoup de* *expressit* *dim*

ミミヲスマセバ オチカタニ ナルモノノアリ ココロカーヨ

cresc *dim*

一、 雪の青さを透す窓
湯気に凍つた蕪ガラス
ぬくめた指で字をかけば
そこから溶けて跡もなく
耳を澄ませば遠方に
鳴るもののあり心かよ

二、 オヤ何の春雪崩かと
我にかえれば軒場から
部屋に温みに溶かされて
雪もつららに落ちた音
ストーブの湯沸いたから
お茶を飲み飲み話そうよ

三、 つのる吹雪に眼が覚めて
たれが呼んでる叩かされて
山の精だとおどされて
かつく布団の暖かくして
冬のヒユツテの夜更け時
呼んでいたのは夢かしら

ベチカ

ゆきのふるよは たのしいベチカ ベチカもえろよ

おはなししましよむかしむかしよもえろよベチカ

雪の降る夜は 楽しいベチカ
ベチカ燃えろよ お話ししましよ
むかしむかしよ 燃えろよベチカ

雪の降る夜は楽しいベチカ
ベチカ燃えろよ おもては寒い
くりやくりやと 呼びますベチカ

雪の降る夜は 楽しいベチカ
ベチカ燃えろよ じき春来ます
いまに柳も 萌えましよベチカ

ベチカ

冬 日 の 恋

1. 冬の日恋は冷たくて

憎んではみたが忘れられぬ
鏡に映る火のように
情熱もなく燃えるのさ
ペーゼもせずに別れてきたが
一人で想えば何となく愛しくなる
自分ではどうしてもできなくて
胸に抱きしめて咽ぶのさ

2. 小雨降る小道淋しくて

あの人の窓に呼びかける
優しい愛のまなざしを
今一度うけて酔いたくて
待つ間も遅くかけよる胸に
木枯吹きすぎ覗きこむ冷たい瞳
恋人のてくた知りながら
淡い夢さめて悔やむのさ

3. 鉛色重い空の下

若い日もいつか色褪せて
並木の隅の埋もれ木に
小雨降りそそぐ我が思い
恋とはかくも悲しいものか
燃えて諦らめまた燃える空し炎
冬の日恋は冷たくて
別れてみたが忘れられず

吹 雪

ロシア民謡

ふき すさぶふ ぶきのみら
ゆき よりしろ いそのえがお
いとしいあのこは どさかるーとま
けがーれをしーらぬ そのひとみー
れよそのーそり いまーいち どう
るわしき きみ わがもとにーとまに

吹 雪

一、吹きすさぶ 吹雪の道
いとしいあの娘は遠さかる
とまれよ そのそり今いちど
うるわしき君 わがもとに

二、雪より白い その笑顔
けがれを知らぬ その瞳
とまれよ そのそり今いちど
うるわしき君 わがもとに

新 雪

- 一、紫けむる 新雪の
峰ふりあおぐ この心
ふもとの丘の小草をしけば
草の青さが身にしみる
- 二、汚れを知らぬ 新雪の
素肌へ匂う 朝の日よ
若い人生幸あれと
折る臉に湯く涙
- 三、大地を踏んで がっちり
未来に続く 尾根伝い
新雪光るあの峰越えて
行こうよ元気で若人よ

残 雪

- 一、月影に残雪冴えて
山は静かに眠る 129
山小屋のひそげき窓に
雲は流れる
雪に埋れし花か
遠き初恋の人
想い出のほだ火は燃えて
胸に迫りくる
- 二、月影に残雪淡く
愛の誓いも空し
涙して餅を呼べど
闇に消えゆく
雪た埋れし花か
遠き初恋の人
白禪の林の道を
迎る人もなし

しゃれこうべと大砲

東大音楽合唱研究会詞
シシリー島民謡

ややおそく

たいほのうえに -しゃれこう -べ- が
うつろなめを -ひらい て -い- た
しゃれこう べ が -ラララ い -うこと にゃ
かねのおと も -きかす に -し-ん-だ

- しゃれこうべと大砲
- 一、大砲の上にはしゃれこうべが
うつろな目をひらいていた
しゃれこうべがラララ言うことにゃ
鐘の音も聞かずに死んだ
- 二、雨にうたれ風にさらされて
空のはてをにらんでいた
しゃれこうべがラララ言うことにゃ
おふくろにも会わずに死んだ
- 三、春が来ても夏が過ぎても
誰も花をたむけてくれぬ
しゃれこうべがラララ言うことにゃ
人の愛も知らずに死んだ

ロッキーに春来れば

(メロディー低音)

ワルツのテンポ 夢みるように

アメリカ歌曲

When its Spring-time in the Rock-ies - I am
 com-ing back to you - Little sweet-heart
 of the moun-tains - With your bon-ny eyes of
 blue; - Once a-gain I'll say "I love you" I while
 the birds sing all the day - - When its Spring-time
 in the Rock-ies - In the Rock-ies, far a way -

The Lonesome Yodeler

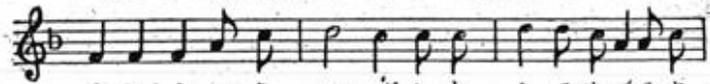
I am just a lone some yo-deler - From the
 daugh-ter mine dear daugh-ter - Why
 heard her fa-ther com-ing - A
 moun-tains oft I roam - I learned to
 do you treat me so - To leave your
 com-ing round the curve - A - puf-fing
 love a mai-den - With hair of pur-est
 dear old mo-ther - And with this yo-deler
 and a - blowing - And strai-ning e-very
 gold - She took me in her par-lor
 go - "Oh, mo-ther mine, dear mo-ther
 nuirve, - "Oh, mo-ther mine, dear mo-ther
 - And told me with her fun - She
 - You know I love you well - But
 - Be-lieve me if you can - If
 whis-pered to her mo-ther - "I love this
 how I love this yo-deler - No hu-man
 e-ver I'm re-tur-ning - I'll be with this

ロツク ローモンド

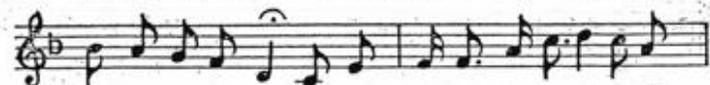
イギリス民謡



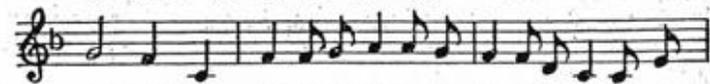
な ー つかしきかわ のきしべ ひか



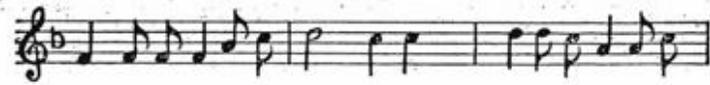
りまぶしロツク ロモンドとも とてをくみさ



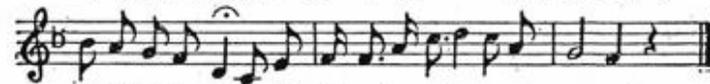
まよいたるこの きーしーベロツク



ロモンドき みのほりわれはくだるゆく



ておなじスコットランドま たかたるとき



もあるまじうる わーしーきロツク ローモンド

ロツクローモンド

二、君と別れかわしたる
谷の坂よベンローモンド
山脈あかく入日に映え
月昇りそめぬ

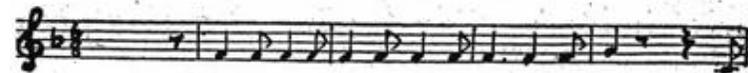
(くり返し)
君のほり我が下る
行く手同じスコットランド
また語る時もあるまじ
美しきロツクローモンド

三、鳥は歌い花咲きて
水はねむり静けし
わびしき胸に春返らじ
惱今はゆきれど

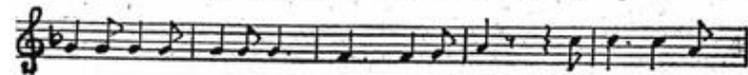
Hinky Dinky Par Lay Vous

Allgroおどるうによ

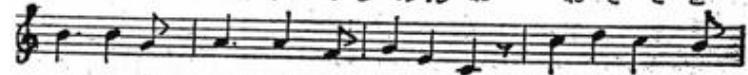
フランス民謡
伊藤信三作詞



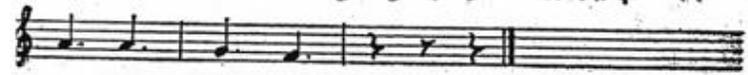
きれいなおはながさいていた テ



ーントの まわり いちめんお おててを



のぼして とろとろしたら ヒンキダン キ



バ ー ブウ ー

一、きれいなお花が咲いていた
テントのまわり一面に
お手々をのぼして
とろろとしたら
ヒンキー デインキー
バーレーブウー

二、かわいい小鳥が鳴いていた
静かな林の暗の中
お耳をすまして
聞こうとしたら
ヒンキー デインキー
バーレーブウー

（ヒンキー・デインキー
パー・レー・ブウー）

羊飼の娘 フランス 民謡
おきはるお編曲

まきばのむすめ エロンロンブテイ
 ばタボンまきばのむすめーひっじのば
 ん ロンロン ひっじのば ん ロンロン

- 二、チーズをつくり
 エロンロン
 ブテイバタボン
 チーズをつくりミルクしほり
 トントンミルクしほりトントン
- 三、それを見ている
 エロンロン
 ブテイバタボン
 それを見ているいたずらねこ
 ボンボンいたずらこボンボン
- 四、足をかけたら
 エロンロン
 ブテイバタボン
 足をかけたらむちでぶつそ
 トントンむちでぶつそトントン

ヘイ!ヤシネック

合唱団さちの実 訳詞
 ポーランド 民謡
 漢名 政 明 編曲

Allegro moderato

1. たねをまくわかしのがこらら
 2. むぎめしにたくあんじおひる

むいててをふるよ } オーイヨイヨーイヨイ
 んでしたないよ }

オーイヨイヨーイヨイ オーヨヨイ オーヨヨイ ヨーイ

いもをはるむすめたちこらら
 のかげにおころんでなまー

むいてわらてるよ } オーイヨイヨーイヨイ
 ビールのみたいよ }

オーイヨイヨーイヨイ オーヨヨイ オーヨヨイ ヨーイ

はてもなき荒野原

はてもなき あれのはら
 いったーゆる ぎよーしゃあわれ
 いったーゆる ぎよーしゃあわれ

- 一、はてもなく 荒野原
息絶ゆる 駈者あわれ
- 二、うるむ目に 馬みつめ
言いのこす そのことば
- 三、わが友よ いささらば
ここ荒野に われ眠らん
- 四、わが馬よ 運びゆけ
わがおもいを 父母に
- 五、伝えてよ わが妻に
とわの別れ この指環
- 六、悲しみに おほれず
之にしあらば 家をもてや
- 七、荒野にて ここゆるも
ながおもかけ 抱きゆく

道

シャーン 作詞
 尖合船団 訳詞

ノヴィコフ 作曲
 おさほるを 編曲

Moderato

1-4. おお みちよ たつほこり
 さむさに ふるえ しげる フーリヤン
 あーすをー われしらす
 あすを も われしらす
 一つあれ のの の つゆと さえん
 ほこりははたけに のべに やまに
 あたりはひの うみ たまはと ぶ(おれ ---)

道

一、おお道よ 立つほこり
 寒さにふるえ 茂るプーリヤン
 明日をも我知らず
 いつ荒のつゆと消えん
 ほこりは畑に 野辺に 山に
 あだりは 火の海 弾丸は飛ぶ

二、おお道よ 立つほこり
 寒さにふるえ 茂るプーリヤン
 鳥は上に舞い
 友はプーリヤンの中に眠る
 けれどなお道は ほこりこめて
 焰 はてもなく燃え上る

三、おお道よ 立つほこり
 寒さにふるえ 茂るプーリヤン
 林に陽は昇る
 ふるさと出で母ぞ思う
 はてしなき道に 山に 畑に
 母は思いこめ われを待つ

四、おお道よ 立つほこり
 寒さにふるえ 茂るプーリヤン
 おお友よ 思い出さん
 ほこりの道 忘れられぬ

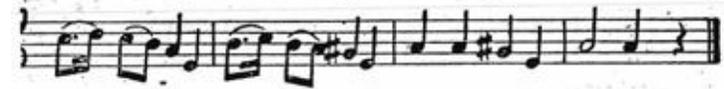
黒い瞳の

早目に

ロシア民謡



くーろいー ひーとー みのわかーもの がー



わーたーしのこーこーろを とりこに した

2. もろ手をさしのべ 若者を
私はやさしく むねにいだく
3. 愛のさゝやきを つげながら
やさしいことばを わたしはまつ

ス リ コ (ロシア)

一、心もうつろに
あてもなくさまよう
あの娘は どこへいつたやら
いとおいしい スリコ

二、夕べの城あとに
みなし子らあそぶ
どこかにスリコが いやせぬか
わすれぬ スリコ

三、森の鶯が
わたしによびかけた
お前は知らぬか鶯よ
スリコの墓を

四、やさしく鶯は
わたしにささやいた
あなたの立つてる その土が

バルカンの星の下で

ブランデル 作曲
イサコフスキ 作詞
楽団カチエーシヤ 歌詞

歩く速さで

くろきーひ とみいず こわがふる
さどーいずーこー ここはとおき
ブル ガーリヤ ドナウのかなたー
こ こ は とお き ブ ル ガー リ ヤ

143

郵便馬車の馭者だった頃

井上頼豊 訳詞
ロシア 民謡

おそくなく
ゆうびんばしらのぎよしだったおれ
はわかくてちからもちそこはちいさなむ
らだったおれはあのこにほれていたそ

2, 娘に不幸が見舞うなぞ

俺は夢にも知らなんだ

馭者の稼業は西東

心はいつもあの娘

3, 安らいのない日々だった

想いは深く胸病む

或る日かしらが手紙を渡し

「はやくたのむぞ駅どめだ」

144

郵便馬車の馭者だった頃

4. 馬はいいなき糞が鳴る

はやてのように野を走る
 だけど胸にはつぶれそう
 あの娘こんなに遠くなる

5. 風が悲しくほえていた

ふいに鳥めがあばれ出し
 おびえたようにおきを見た
 俺にはわけがわからない

6. どうきははげしくたかまつて

俺はみつめた雪の中
 あばれる馬からとびおりた
 誰かが道に倒れてる

7. 吹雪は渦巻きあれていた

俺は雪をばかきわけた
 血の気がうせて立ちすくみ
 寒さがシューバにしみた

8. 皆の衆あの娘が死んでいた

茶色の瞳を閉じて
 酒をくれ早く酒を
 もうその先は話せない

草原情歌

青海民謡
 青山梓訳詞
 劉俊南作詞

はるかばなれた そのまたむこう
 だれにでもかゝれる きれいなむすめがいる

草原情歌

一、はるかばなれた
 そのまたむこう
 だれにでもすかれる
 きれいな娘がいる

二、明るい笑顔

お日さまのよう
 くりくり輝く目は
 お月さまのよう

三、お金もたからも

なんにもいらぬ
 毎日その笑顔
 じつとみつめていたい

四、山羊にでもなつて

いつしよにいたい
 毎日あの村で
 私をたたいておくれ

津 軽 山 唄

Lento lamentoso (♩=54~56)

青森県民謡

ヤ イ ジャ - - ジョ - - ジョ - - オ - - オ - - オ

---や 十五 や しーい --- いーち --- い---

い---が---やエ --- 二 や ---まを--- オ---

み ---ねの--- オ---

のほ---りに い--- ふ え --- ふ な ---

こま---つが ---

ウ---け --- エ---ば--- ヤエ ---

ア---び --- イ---く --- ヤエ ---

ハヤイジャー 十五、七がヤエー

山に登りに 笛吹けばヤエー
峰の小松がみななびくヤエー

ハヤイジャー 百沢がヤエー

五百羅漢の五葉の松ヤエー
三度拝めば若くなるヤエー
おれも拝みたい五葉の松ヤエー

ハヤイジャー 浪岡のヤエー

源如林の銀杏の樹はヤエー
枝は浪岡 葉は黒石でヤエー
花は門外の城に咲くヤエー

ハヤイジャー 津軽富士ヤエー

冬は真白く 春青くヤエー
夏は墨染め 秋錦ヤエー
衣替える鮮やかさヤエー

どじょっこ ふなっこ

野題をもつて

東北民謡

はるに なれば し が こも と け て

ナンニ ナレバ ワラシコ オヨギ

どじょっこの ふなっこの よるが あけたと おもへな

ドジョツコダノ フナッコノ オニツコキタナトオモヘナ

春になれば し が こも と け て
どじょっこの ふなっこの
夜が あけたと 思ふべな

夏になれば わらしこ泳ぎ
どじょっこの ふなっこの
鬼つこきたなと 思ふべな

秋になれば 木の葉つこ落ちて
どじょっこの ふなっこの
舟つこ きたなと 思ふべな

冬になれば しがつこもはつて
どじょっこの ふなっこの
てんじょつこ はいたと思ふべな

秩父音頭

埼玉民謡

ハア ----- エ とりも
 わたーるか あの一やまー こえーてー とりも
 わたるかー あの一やまー こえてコラ ソクものーなあ
 ----- エーくもの さーわー たーつー
 あれさ おーく たちー ぶ

ハアエー 秩父仕舞うて麦まき終えて
 秩父仕舞うて麦まき終えて
 秩父ナーエ 秩父夜祭りあれさ待まつばかり
 ソーレ オラガホウジヤ コウダヨ
 カカシケリヤ クライナ コラシヨ
 ハアエー わたしや本場の秩父の娘
 わたしや本場の秩父の娘
 コラシヨ
 働にやエー 働にやおとらない あれさ色模様
 ハアエー
 そろた そろたよ踊子がそろた
 そろた そろたよ踊子がそろた
 コラシヨ
 稲のナーエ
 稲の出穂より あれさ良くそろた

もずが枯木で

ゆつくり感情こめて

茨城民謡

もずがかれきで ないている
 おいらはわーらを たよいてる
 わたびきぐるまは おばあさんー
 コットンすいしよも まわつてる

もずが枯木で
 一、もずが枯木で鳴いている
 おいらはわらをたよいてる
 綿びき車はおばあさん
 コットン水車もまわつてる
 二、皆去年と同じだよ
 けれど足んねえものがある
 兄さの薪わる音がねえ
 バツサリ薪わる音がねえ
 三、兄さは満州へ行つただよ
 鉄砲が涙でひかつたぜ
 もずよ寒いと鳴くがよい
 兄さはもつと寒いだろ

糸魚川小唄

一、登ぼろ登ぼろよ白馬のお山によちヨイセ
糸魚川からねちヨイトセ姫川づたい
汗は蓮華の湯つぽで流し
お花畑を寝どころに

(くりかえし)

ヤレサツテモ サツテモ
ヤレヨイヤサ ヨイヨイヨイ

二、夜はむらさめからりと晴れてよちヨイセ
山は紅葉のねあの裾模様
りんと立ちたる黒姫様も
今朝はほんのり薄化粧

三、雪は降る降る昨日も今日もよちヨイセ
明日は雪かよねちヨイトサこたつの窓の下
歌ではげまし話でなだめ
同じ想いで春を待つ

谷川小唄

一、桜散る散る ゴルメル屑によ
お山見上げりや見やげりやよ
ドンと照る雪だよ
ヨイトコラセツセくくく
(以下くり返し)

二、縁したたる

今日のルンゼガルンゼガヨ
ドンと薄化粧だよ

三、凍る朝だよ

かゝるFF¹²がよ
ドンとのしかゝるよ

四、ザイがついで滝沢

男度胸の命をかけた
ドンと勝ち壁だよ

北穂小唄

登る登るよ北穂の山によちヨイセ
横尾谷からネーちヨイトサ

酒沢づたい

雪溪渡つてガラ場を越えりや

前穂眺める花の道
ヤーレさつてのサツテモネ
ヤーレヨイヤサノヨイヨイヨイ

笠のあなたに夕日が落ちてよちヨイセ

飛弾の夜風がネーちヨイトサ

肌えに寒い

思い新たなあの岩尾根に

積んだケルンがなつかしい

小屋にともつたランブのはかげよ

夜は楽しやネーちヨイトサ
こたつのまどる
ちヨイセ

明日は何故か北穂の池か

お花畑は花ざかり

野沢小唄

一、千曲渡ればナアー野沢の出湯よ
渡り鳥さえ知らぬ鳥さえ
寄るものヤレサノ
(くりかえし)

サユラユラユラリは湯の煙

チヤラチヤラチヤラリは水の音
ササチヤラリトナ

二、妙高戸隠ナアー燦もあれどよ

さまのお国はいとし姿は

どこじややらヤレサノサ

三、昔忘れずナアーこおろぎ峠よ

越えて来るとは越えて来るとは
なつかしやヤレサノサ

四、磨く男のナアー舞台は此処よ

野、スキー又とありやせぬ
ユートピアヤレサノサ

中野小唄

信州広くも中野がなけりや

ヨイトコリヤドツコイサノセセセ

何処に陽の照る

町がある

カナカナカノカ

ナンセカンセドツコイサノ

信州中野はおかいどころ

中野つむぎの

出るところ

中野生れは氣立で知れる

横に車は

押しやしない

婆さどこえ行く三升樽下げて

嫁の在所

中野よいの誰が水さした

町の真中に

川がある

島田結はせて黒姫山に

骨があるなら

嫁にやる

峠越えればあけびの口が

ツルべ落しの

日が落ちる

信州中野の真ッバよりも

わたしやあなたの

そばが良い

大町小唄

山にのぼるか

のぼろうよ山に

みそら十里は

コレヤレコノ大町や

鹿島瀧川

高瀬の溪谷に

忍び岩魚の逢瀬町

蓮華夕映え

安曇野日和

月か日町か

木崎青木に

中瀬かけて

緑たぐろか

丹波山小唄

一、そよりそよそよ 青葉の頃は

雲取三条 大菩薩

天平尾根に わらびがもえて

観光丹波山

それ人を呼ぶ

皆こい皆こい 山の里山の里

二、さらりさらさら 丹波川背音

水も清けりや 人情もきれい

あゆをとかした瀬瀬のほとり

やまめがびかり

それつりあげた

皆こい皆こい 山の里山の里

木曾節



きその な-----なかのりさ-----ん



きそのおんたけさんわーなんじやはーおい



なつでも-----さむい。よいよいよい

木曾節

一、木曾のナ
なかのりさん
木曾のおんたけさんは
なんじやはらい
夏でも寒いヨイヨイヨイ

二、あわせナ
なかのりさん
あわせやりたや
なんじやはらい
たびをそえてヨイ

三、かわのナ
なかのりさん
かわのなるせと
なんじやはらい
しかのこえヨイ

四、霧のナ
なかのりさん
霧のかゝらぬ
なんじやはらい
やまはなしヨイ

五、かさのナ
なかのりさん
かさにこの葉が
なんじやはらい
まいかゝるヨイ

安曇節

- 一、寄れや寄つて来い安曇の踊り
田から畑から野山から
- 二、音頭とりましょ おおせとあらば
西の山までくくとくまで
- 三、槍や穂高は霞で見えぬ
見えぬあたりが槍穂高
- 四、安曇踊りと三日月様は
次第くく丸くなる
- 五、日本アルプスどの山見ても
冬の姿で夏になる
- 六、白馬 八月残りの雪を
割りて咲き出た花の数
- 七、いわな釣る子に山路問えば
雲の行く手を竿で指す
- 八、槍で別れた梓と高瀬
めぐり会うのが押の崎

- 九、何を思案か有明山に
小首かして出たわらび
- 十、安曇乙女とあの白樺は
生れながらの白い肌
- 十一、山にこがれて徳本越せば
白い化粧で待つ穂高
- 十二、わじが想いに比べて見れば
うすい煙の焼ヶ岳
- 十三、槍を下れば梓の谷へ
見合涼しい上高地
- 十四、聞いて恐ろし 見て美しや
五月野に咲く鬼つつじ
- 十五、槍で明けてもまだ安曇野は
夜のとばりの夢の中
- 十六、槍や穂高を屏風とすれば
蝶や大竜花巻敷

田原坂

Maestoso

熊本飛良詞

あめはふるふるーじん
 ははぬれーるこすに
 こされぬーたばるさか

- へ雨は降る降る 陣羽は濡れる
越すに越されぬ 田原坂
- へ右手に血がたな 左手に手綱
馬上ゆたかな 美少年
- へ山に屍 川に血流る
- へ草をしとねに 夢やいずこ
明けのみに空に 日の御旗
- へ泣いてくれるな かわいの駒よ
今宵しのぶは 恋でなし
- へどうせ死ぬなら 桜の下よ
死なば屍に 花が散る
- へ田原坂なら むかしが恋し
男闘士の 夢の跡
- へ春は桜よ 秋ならもみじ
夢も田原の 草枕
- へおれの父ちゃん 位がござる
なんの位か 酒くらい

五つ木の子守唄

- へおどま勸進 勸進
あんなたちや よか衆
よか衆 よか帯 よか着物
- へおどま盆ぎり 盆ぎり
盆からさきや おらんど
盆が早よくりや 早よ戻る
- へおどんが打死だちゅうて
だいが泣あてくりゆうきや
裏の松山 蟬が泣く
- へおどま勸進 勸進 ガンガラ打
つてさろく、チョコカ(土)でままぢや
あて堂に泊まる
- へねんね一過言うて
眠らぬ奴は
頭叩いて 尻ねすむ
- へおどんがお父つあんな
あの山居らす

島原の子守唄

- 一、おどみや島原のく
梨の木そだちよ
何の梨やらく
色気なしばよ しょうかいな
はよねろ泣んで おろろんばい
鬼の池久助どんの連れんこらるばい
- 二、帰りにや寄つちやくれんかく
あばら家じやけんど
と芋飯や粟ん飯く
黄金飯ばよ しょうかいな
嫁御ん紅んな誰がくれた
つばつけたなら赤かったかる
- 三、沖の不知火く
消えてもゆる
ばてれん祭りのく
笛もたいこもなりやんだ
早よねる泣かんで おろろんばい

稗つき節

宮崎県民謡

J=88

にわのさんしーのーに
 ーなるーすーず
 ーかーけーてーヨーオーホイ
 すずのならーとーとーでー
 てーおーおーお
 ーオーーじゅれーよー

へ庭の山椒の木に鳴る鈴かけて
 ヨーホイ
 鈴の鳴るときや出ておじゅれよ
 出ましょ ヨーホイ
 駒に水くりよと
 いうて出ましょよ
 へなんほ搦いても この稗やつけ
 ぬ ヨーホイ
 どこのお倉の下積みかよ
 へおまや平家の 公達ながれ
 ヨーホイ
 おどま通討の 那須の末よ
 ヨーホイ
 へ那須の大八 鶴富捨てて
 ヨーホイ
 椎葉立つときや 目に涙よ

刈干切唄

Larghetto tranquillo

宮崎県民謡
服部龍太郎 採譜

ここのーやまのーかり
 ぼしーすん
 だーよーあす
 はーたんーげーでーえー
 エーいねーかーろーかよ

へこの山の刈干や すんだよ
 あすはたんほで 稲かろかよ
 へもはや日暮れじや 迫々かけるよ
 駒よいぬるぞ 馬草負えよ
 へ秋もすんだよ 田のくろ道をよ
 あれも嫁じやろ 灯が五つよ
 へ屋根は葺ぶき 萱壁なれどよ
 昔ながらの 干木をおくよ
 へ誰に見らりよと 思うて咲いたよ
 谷ま谷まの 岩つつじよ
 へ高い山から 握りめしゆこけた
 からさよろこぶ わしやひだりよ

安里屋ユンタ

八重山列島民謡

♩-76

サア あ さ ど やーぬーくーやー
ま にーよ (サア ユ イユイ) あーんち
ら さーまーりーばーし よ (マク
ハーリヌ チンダラ カヌシマヨ)

(安里屋ぬくやまによ(サアユイユイ)
あん美らさ・生りばしよ(マタハ
リヌ チンダラ カヌシマヨ)
(以下唯し言葉同じく)
目差主ぬ 請ゆだら
あたる親ぬ 望みまよた
目差主や ばなんば
あたる親や くりやゆむ
否でから みしやさみ
嫌でから ゆくさみ
否ですね 見る目ん
嫌ですぬ 聞く耳
仲筋に 走りおり
ふかんどに 飛びやおり
道回りし 見りばど
村くりし 聞きばど
道回りぬ 美らさす
村くりの かいしやす

平城山

mf

ひと恋う は かなしき もの と
mf
ならやまに もとおりに来 つつ
たえがた かりーき
いにしえも
つ まに 恋い一つつ 越えしとうー ならやまの
なちになみだおとーしーぬ

ダンチヨネ節

あすは おたち — — か おなご
 — — り お — — し — や あめの
 とおかもネ ふれば — — よいがダンチヨネ

2. 雨の十日は まだまだ足らぬ
 雪の千丈もネ 降ればよいが ダンチヨネ
3. 雪の千丈は まだまだおろか
 槍の千本もネ 降ればよいが ダンチヨネ
4. 可愛いあのこは 笑顔に涙
 ふたり一しよにネ 行けりやいが ダンチヨネ

サヨウナラ

- 一、これでお別れか
 おなごり惜しや ヨイヤサ
 雪の千丈もね 降ればよい
- 二、山でふつと見た
 あの娘の顔が ヨイヤサ
 なぜか気になる 泣きぼくろ
- 三、ヨードルかけましょか
 岩場の娘に ヨイヤサ
 歌うハーケン 血がおどる
- 四、山で呼びましょか
 あの娘の名をば ヨイヤサ
 今じやこだまも かえらない
- 五、むかし二人で
 歩いた道も ヨイヤサ
 今じやはかない 一人旅
- 六、お嫁に行くなんて
 ひどいやないか ヨイヤサ
 もう一度云わせてね さようなら
- 七、何もいわずに
 およめに行くの ヨイヤサ
 それじやあんまり つれなかる

別れの日はずらい

一、別れの日はずらい僕らの山よ
遠い頂きに別れのこだま

二、別れの日はずらいタンネの林
深い粉の雪兎ははねる

三、別れ日はづらい山の乙女よ
雪のうなじを紅葉める

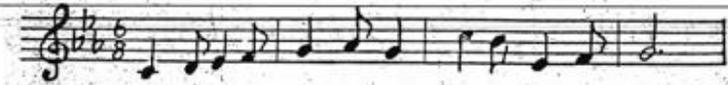
忘れな草をあなたに

一、別れでも別れでも心の奥に
いつまでもいつまでも
覚えておいて欲しいから
幸せ祈る言葉にかえて
忘れな草をあなたにあなたに

二、いつの世もいつの世も別れる人と
会う人の会う人のさだめは
常にあるものを
只泣きぬれて浜辺に摘んだ
忘れな草をあなたにあなたに

三、喜びの喜びの涙にくれて
抱きあう抱きあう
その目がいつか来るように
二人の愛の思い出そえて
忘れな草をあなたにあなたに

惜別の歌



たとおきわかれに たえかねて



このたかど---の---にのぼるかな



かなしむな---かれわがと---もよ



たびのころ---も---をととのえよ

2. 別れと言えはむかしより この人の世の常なるを
流るゝ水を眺むれば 夢はずかしき涙かな
3. 君がさやけき目の色も 君くれないのくちびるも
君がみどりの黒髪も 又何時か見んこの別れ
4. 君が優しきなくさめも 君が楽しきうた声も
君が心の琴の音も またいつ聞かんこの別れ

蒙古月雲見

1. 男一匹、やうだけやれば、何のこの世
に未練はあろうか。

吹けよ、立巻、アルタイ越えて、俺も
走りせ、命の限り。

2. 俺が死んだら裸のまま、ゴビの
砂漠に、うらやめておくれ。

どうせこの身に狼の血が、韃の
代から流れていいるせ。

3. 胞にひめたる男の夢は女なんか
に解るものおか、五ツでしやくうか
小指で示そうか、蒙古百下。

火丁 ^の糸 _{たがひ} 11。

29日

松尾氏



所属	立寄録中
氏名	松尾 氏